どうやら、いじめられっ子の魔王が俺と世界征服したいそうです。new

水面

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
どうやら、いじめられっ子の魔王が俺と世界征服したいそうです。
ｎｅｗ

【Ｎコード】
Ｎ４２０２Ｙ

【作者名】
水面

【あらすじ】
勇者の末裔である《東條信弥》は、偶然にも魔王を現代へ召喚してしまった！
でもこの魔王様、いじめられて？ずいぶんと内気で残念な性格になってしまったようです。
勇者に対して全幅の信頼を置く魔王《咲耶》は勇者《信弥》にべったり。
そんな彼女の目標は世界征服！

でもなぜかボランティア部に入ることに。
世界の征服も人助けから?!
ギャグありシリアスありのロリっ子魔王奮闘記!!
の書き直し。

プロローグ（前書き）

魔王が封印されていたらしい

プロローグ

学校の怪談。

誰が考えたのか、どこも同じようなしっぱい話がいくつかある不思議なアレだ。

もちろんこの俺――東條信弥が通っている学園にもある。

トイレにいらっしゃるあの方。自走する模型。目を光らせたり、頼んでもいないのにピアノを弾く音楽室の偉人。

その内容には諸説あるが、毎年欠かさず登場しているらしい、とある変わった話がある。

校舎と裏山の間にそびえたつ大桜。

四～五人の手を繋いでようやく囲める樹幹。遙かに見上げるその高さ。

舞う桜花は涼風に乗り、空と大地を桜色に染め上げる。

昼休みの桜の広場では、女の子たちがベンチや芝生の上で弁当を広げて、他人の恋だの愛だのにうつつを抜かし、嫌味ったらしい先生の悪口で盛り上がる。

その横で遊具を手にふざけてはしゃぎまわってはいるが、ちょっぴり女子のことを意識してしまっている男の子たち。

そんな大桜には……、

どういう訳だか魔王が封印されていたらしい。

何かが憑いててもおかしくないほどの立派な大樹だと思うが、学校の怪談くらいで魔王様がしゃしゃり出て――もとい、いらっしゃなるなんて安売りはやめたほうがいいと思う。

満開の大桜を見上げるのは、今年で三度目になる。

この桜は、いつからここに在あるのだろうか。

俺が生まれる前から……。

いいや、そんなちっぽけなものじゃ比較になりはしない。

たとえこの命が尽き果てようとも、幾星霜（いくせいそう）の時を刻む年輪は、決して途切れることなく続いていくだろう。

無数の傷とガサツな表皮を纏った姿は、一見すると綺麗なものではないかもしれない。

しかし悠久を経たその風采は美しいと、俺は思う。

春夏秋冬を経て新たな世界を積み重ねている間、大樹からしたら極僅かな時間なのかもしれないが、同じ場所で同じ時間を過ごさせてくれたことを改めて感謝したい。

そうやってまたひとつの歴史を見守って、その輪に刻んでいくのだろう。

「のぉ信弥、わらわは小腹が空いたぞ。いつまで桜と戯れておるのだ」

封印されていたらしい？　小さな魔王様が駄々をこねる子供のよ

うに、制服の袖をぐいぐい引っぱりながら訴えてきた。

「そうだな、帰って美弥(みや)が作ってくれる晩飯を食べようか。今日は咲耶が好きな鳥のから揚げらしいぞ？」

「本当か！　もぅ～、美弥めぇ～。わらわのご機嫌取りとは、愛(う)い奴めっ」

長い銀の髪を元気よく跳ねまわらせて、すこぶる嬉しそうだ。

俺と咲耶はしっかりと手を繋いで、歩き出した。

現世(うつしよ)は変わらない。

プロローグ（後書き）

どこが面白かった、面白くなかった。
些細なことでもかまいませんので、感想をいただけると嬉しいです。

出会い（前書き）

美弥が垣間見たものとはなんだったのだろう

出会い

午前中のイベントである春の式典が終わった。

眠たくなる校長の話を聞くか、眠たくなる授業を受けるか。

どちらにしても、ありがたいことに本日はこれで下校となる。

着慣れない学ランやブレザーを身にまとい、ちょっとぎこちないが新しい生活に胸躍らせる新入生たち。

早速出来た友人と廊下でたむろする彼等を上手に避けて昇降口へ行き、慣れた手つきで靴を履き替える上級生。

ずいぶん迷惑だった去年の自分に反省した。

だからというわけではないが、皆が向かう正門ではなく、校舎の裏山側へとやってきた。

太い幹を大地に根付かせた大桜がある。

競い合うように天へと伸びた枝が放物線を描き、無数の小枝の先から空を覆い尽くすように淡紅色の花弁が溢れだしている。

桜の大樹は風に枝葉を揺らし、あたり一面に花びらを散りばめて俺を歓迎してくれた。

手近なベンチへと腰掛ける。

見上げると、目の前に桜の花びらが舞い散る。

大きく広がった見事な枝が、桜の花をいくらでも咲かせていた。

咲き乱れる桜を見にくるような雅（みやび）な趣味でも、見ず知らずの女の

子から手紙で呼びだされる程もてる男でもないが。

視界の向こうからこちらに駆けてくる女の子が一人。
本日めでたくこの東武学園に入学した、妹である東條(とうじょう)美弥(みや)だ。

忙しい親の変わりに我が家の家事を一手に引き受け、毎日おいしい手料理を作ってくれる。
起きるのが遅かった朝には、寝ている俺の隣にやってきて「兄さん、起きてください」と甘く囁いてくれたりして。
おしとやかでいて、いつも優しい微笑を浮かべている彼女ではあるが、怒らせてしまうとかなり怖い。
とくに食事が露骨に変化するので、ある種の『妹ご機嫌メーター』となっていた。
そんな意外な一面も俺だけに見せてくれる。

近頃の兄を毛嫌いする妹とはまるで別種の生きものなのである。

華奢な体にではあるがとてもよく発育した胸をもち、言い寄る男が後をたたない。
学校が離ればなれになったこの一年、お兄ちゃんとしては気が気じゃ無かったよ。

そんな感じで頭良し、顔良し、性格良し、妹度良し。
俺なんかにはもったいないくらい、『よく出来た妹』なのだ。

ベンチから立ち上がって美弥を迎えた。

急ぎ駆け寄ってきた妹は膝に手をついて、長く艶やかな二つ縛りの髪を上下に動かしながら息を整える。

肩に舞散る桜と同じうすいピンク色に頬を上気させながら、申し訳なさそうに言う。

「に、兄さん……、遅れて……、ごめんなさいっ」

「そんなに急がなくてもよかったのに」

肩についた花びらを指先で払ってやる。

美弥はほんのりと顔を赤らめて、照れくさそうに答えた。

「だ、だって、せっかく兄さんが学校を案内してくれるのです。でも、ここに来るときに少し迷ってしまって……」

「やっぱり昇降口あたりで待ち合わせたほうが良かったんじゃないかな」

「いいんです。こういうのもデートの待ち合わせみたいで新鮮でしたよ。……それで、これが桜の大樹ですね。すっごく素敵です」

つられて視線を移すと、咲き乱れる桜花と青空のコントラストが眩しい。

風に舞い踊る花びらが、ここではない違う世界(とこよ)へと誘っているかのようだった。

「くしゅん」

かわいいくしゃみが聞こえた。

初春の冷たい空気が、美弥の汗と一緒に体温も風に乗せていったのだろう。

「美弥、大丈夫？」

「大丈夫ですよ兄さん。でも久しぶりに撫でてほしいです。いい、ですよね……？」

よく出来た妹は時々こうして兄に甘えてくる。

こんな風におねだりされて断ることが出来る兄はいないだろう。

もし居るならば、そいつには兄の兄たる資格などありはしない。

今は誰も見当たらないが、いつもは人で溢れている場所で妹の頭を撫でるというのは、少し気恥ずかしい。

だがこれも兄としての勤めである。

はにかみながら愛しの妹に手をのばした。

「よしよし、なでなで」

気持ちよさそうに目を細めて、「ふにゃ〜」と猫みたいな声を出して撫でられるがままだ。

ご満悦の美弥だったが、――薄紅色だった顔が心なしか青く変わっていく。

我が妹らしからぬ驚愕（きょうがく）の表情で怯えているようだった。

「どうした？　なにがあったんだ」

かすかな声を残して卒倒した美弥をあわてて抱きかかえる。

「美弥、美弥！」

「に、兄さん……」

ふらついている腕を桜の方へ向けて、力なくうなだれてしまった。

美弥が指し示す先に何があろうというのか。

俺はおそるおそる慎重に、指が示していた背後を振り向く。

吹き抜ける桜に舞う銀の軌跡――長い銀髪を風になびかせていた少女がそこには居た。

派手すぎない装飾を施した白衣と、胸元に見える朱い掛襟（かけえり）。

同じ朱色の足元まである緋袴（ひばかま）。

そこからちょこんと飛び出た白い足袋（たび）。

これは巫女服だな。

しかもただの巫女服じゃない。素人目から見てもコスプレや神社で見るバイトの巫女さんの着ている物より、ずいぶんと高級品であろう。

だがせっかくの衣装もあちこちすすけたり、ほつれている。

なによりこれを着ている銀髪少女は頭を抱えて丸くなりながら、小柄な体をプルプルさせている。

そんな仕草が、まるで雛鳥のように思えた。

すごく残念な感じの姿ではあるが、だんだんと愛らしく思えてくるから不思議だ。

突如現れた少女に、思い切って話しかけてみる。

「あの……」

ピクリとだけ反応した。

片方の瞳だけを使い、おっかなびっくり上目遣いに覗きこむ。

かわいい……。すっごく守ってあげたくなる。

「萌えとは、保護欲と支配欲との葛藤からくるものである」と、聞いたことがある。
今感じているこの感覚が、その萌えというやつなのだろう。
そんな彼女と一瞬だけ目が合ってしまった。

「ヒッ」

短い悲鳴をあげて、先程よりますます怯えたように顔を伏せてしまう。

頭から背中にかけて、何者にも染まらない輝く銀の髪が、桜の花びらを浮かべて流れている。
そこに添えられる幼い手。

美少女という言葉はよくあるが、美幼女というのはなかなか聞かない。
おそらく幼女はもれなく可愛いからだろう。
そしてこの子の小さくてやわらかい丸みを帯びたは顔は、下を向いていても美幼女とも言うべき類まれなる人類の宝だと分かる。

再びゆっくりと、腕の隙間から顔をだした彼女。
不意にこちらを見つめかえしてきた。

大きくて純真無垢な瞳。

その瞳に写る深い感情を俺は読み取ることは出来なかった。
幼い子とは思えない全てを見通したようなその目には、俺がいくら足掻こうとも決して到達することはできない感情が宿っているの

かもしれない。

「……そ、そなたらは、その……、東(あずま)の者であろう」

搾り出すようにして出された声は風にかき消されそうで、聞きとるのがやっとだ。

だが澄んだ彼女の声はよく通るような気がする。

「俺の名前は東條信弥。こっちは妹の美弥。きみは？」

ゆったりと立ち上がった小さな少女は、とてとてと近よってくる。

腰まわりに抱きついて――もとい、しがみついて顔をぐりぐりと制服にうずめる。

「やっぱり東の者じゃな。会いたかったぞ。よくぞ我を助けてくれたのじゃ」

震えていたわりには、なかなか偉そうな言葉づかいである。

両手で制服を掴んでぐいぐいとやってきて離そうとしない。

近くで見てみると、やはり小さい子だ。

先程までこわばっていた顔はあどけない笑みへと変わっており、見た目相応に愛らしい。ぼろぼろな簪(かんざし)もよく見ると精巧な造りで、さらさらな銀髪から薫(かお)る甘いお香が鼻をくすぐる。

揺さぶられているうちに、腕の中で美弥が気を取りもどした。

「……に、兄さん私、宇宙を見たんです……。三次元宇宙を内包する四次元世界が干渉して生まれた時空の裏側を。私は確かに――」

「もういいんだ美弥。世の中には忘れても許される事もあるさ。そ

れにこの物語はそういう方向性じゃないんだ」

目の焦点が定まっていない妹を優しく諭してあげた。

「よ、よく解らないですけど……、兄さんが言うならそうなのかも……」

よく出来た妹は物分りも大変よろしい。

肩を貸してやると、おぼつかない足取りながらも立ち上がった。

まだ制服を引っぱっている少女の目線にあわせて中腰になり、優しく語りかける。

「こんにちは。私は東條美弥っていいます。よろしくおねがいします。あなたのお名前を教えていただけませんか」

その問いかけに俺の制服から手を離した少女。胸を反らして腰に手を当てて、「どうだ！」と言わんばかりの態度でのたまう。

「東の妹じゃな。うむ、わらわは遥か昔この地を統べた魔王が一人、天白羽神玖珂院咲耶之姫（あめのしらはのかみくがいんさくやのひめ）じゃ。『咲耶』と呼んでよいぞ」

え～っと……。

どうしたものかと美弥と顔を見合わせてしまったが、そこにちょうど良いタイミングで校内放送がかかる。

〈ピンポンパンポーン〉

（生徒の呼び出しをします。二年四組東條信弥。ならびに、一年三組東條美弥。職員室まで来るように。くり返します。二年――）

魔王（前書き）

世界征服、なのじゃ

魔王

遥か昔、人間と魔物は共存していました。

魔物とは、多種多様な種族を含む、力を持つ者の象徴。

神、天使、悪魔、幻獣、妖精、ある地方ではドラゴン、ヴァンパイア、妖怪。

その中でも、人には為しえない御業を起こす存在で、特に強い魔物を――魔王と呼んだ。

彼らは良き隣人であった。

しかし時を重ねるにつれ、人間は魔物の持つ絶対的な力を恐れるようになりました。

ついに、人間たちは魔物の討伐を決めた。

力ある人間――勇者の指揮で、魔物を常世（とこよ）へ還します。

神が統べる島国。

特に力の強い魔王が、東と西と南と北に分かれて暮らしていた。

彼らは自ら常世（とこよ）へ還りました。

その中で、東の魔王は最後まで残り続けました。

この魔王はあまりの強大な力故に、常世(とこよ)へ還ることができなかったのです。

時の勇者――東比之守(あずまびのかみ)は、魔王の力の根源たる肉体と精神ではなく、魔王の心を封じこめ、常世(とこよ)へと還したのでした。

魔王の歴史　其の一

裏に英語の問題が書かれているプリントを再利用した、手書きのパンフレットを読み終える。

先ほどの放送で職員室に俺達を呼びだしたのは、二学年副主任である秦宮真理子(はたみやまりこ)先生だ。

抜群のプロポーションと端麗な顔の持ち主で、型破りな性格ではあるが生徒達からの信頼は厚く、人気が高い先生である。

どかりと座りこんでいる秦宮先生は、すらりと長い足を組みかえて、面倒くさそうに言った。

「読み終えたかい。そういうわけでその子は魔王なんだ。よろしくしてやってくれ」

「よろしくと言われても……。魔王が復活って世界規模でやばい感じがしませんか？　なんとなくですけど……」

「そういう魔王も居るかもしれないな。でもその子は大丈夫だろう。それに弱い魔物――君たちが思うところの悪魔だとか妖怪なんかは現世(げんせ)に結構居るんだよ。世間にはあまり知られてないかもしれないがね」

秦宮先生が天のなんとか――咲耶と名乗った少女に視線を向ける。

彼女は俺の後ろに隠れてしまって、離れようとしない。

確かにこんな子が魔王といわれても説得力に欠ける。

「魔王クラスの魔物だってちょくちょく現世(げんせ)に来てるよ。今は西の魔王――稲荷神(いなりのかみ)が遊びに来てるんじゃないかな」

その名前を聞いたとたん、背中で魔王(さくや)が震えあがった。

「心配しなくても、昔は仲良く暮らしていたんだ。早々めったなことは起こらないよ」

とりあえず世界が滅亡するとかはないらしい。たぶん……。

「神様でも魔王とよばれる理由はなんとなくですが理解できました。でも勇者って何かおかしな感じがしませんか？」

「魔物や魔王、勇者ってのは世界中にいるんだ。グローバル化の波に乗って、国際規格を決めて日本語訳にすると勇者だったんだ。あきらめろ」

「はぁ……」

「それで、ここからが本題なのだが」

ダルそうにしていた顔を少しだけ真面目して、話を続ける。

「天白羽神玖珂院咲耶之姫様(あめのしらはのかみくがいんさくやのひめ)はそのパンフにも書いてある通りちょっとばかし特殊でね。魔王なのに幼く感じるのは封印のせいだろう。それをあんたが解いちゃったんだろうね」

「でも俺、封印なんて言われても……。何がなんだかさっぱりです」

「それは、そこの魔王様にお伺いしてみるのがいいんじゃないのかな」

俺の下半身を、マーキングしている猫のようにうろちょろしていた咲耶を捕まえて聞いてみる。

「われを封じた呪術を解くには三つの要素が必要であった。一つは東の血族であること。一つは慈愛の心。一つは相手を思いやるものと、頭を撫でるときの言霊じゃ。わらわが現世(うつしよ)に再び参る時に『味方になってくれる者が必ず居るように』と、東がはからってくれたのじゃ」

あのとき、慈愛の心で「大丈夫？」と声をかけて、美弥の頭を撫でた気がする……。

「素敵なお話ですね」

いままで話の流れを見守っていた美弥が言った。

「……なるほどね。本来この東武学園は、咲耶様を見守るためにできたんだよ。私はその現管理人みたいなもん。当時としては追い出す形になってしまったが……。現世(げんせ)と常世(とこよ)の交流は続いてるの。封印の解き方が分からなかったから、咲耶様を現世(げんせ)にお呼びする事ができなかったんだよ」

秦宮先生は複雑そうな顔をして、咲耶を見つめていた。

「それにしても、天白羽神様はけっこう上位で取り扱い注意な魔王様なんだけど。どうしてこんなに内気なのかしら？」

同じ疑問を持った俺は、咲耶に聞いてみる。

「常世(とこよ)でみんなわらわに意地悪するのじゃ。いやだって言ってるのに離してくれないし。おまけにあちこっちさわってくるし。むりやりご飯たべさせられたり。なにかにつけてわらわをいじくりたおすのじゃ。もういやなのじゃ……。わ、わらわにも人権というものがあるのだ。それに――」

言っているうちに、だんだん目に涙を浮かべていく。

これだけ聞くと、なんとなく卑猥に聞こえてしまうな。

魔王は腕をぶんぶん振りまわして必死に訴えている。

かわいがる気持ちも分からなくもないが……。

思いのたけをぶつけ終えた咲耶。すごすごと俺の背中に隠れてしまう。

そして、秦宮先生は彼女の話をまとめた。

「どうやらこの魔王様は、いじめられてこんな性格になってしまったらしい」

「……」「……っ！……」「……」「……」

まるでモノクロカメラで撮られた写真のように、世界が停止していた。

あ～～、言ってしまった……。

俺と美弥が気づいても言わなかった一言を、本人に向かってド直球で言ってしまった。

息を止めて心の中で苦笑いを浮かべる。

身動きをとることは許されない。
動いたら最後、そこからビリビリと魔王の威厳やプライド的なイメージが細かく千切られていくだろう。

しれっとした顔でいる秦宮先生。
咲耶も俺の制服の袖をつかんで動かない。

この沈黙を破ったのは、意外にも咲耶だった。

「……せいふく。せ、世界征服じゃ。あやつらを見返すには……、この地をわらわのもにするしかないのだ！　信弥もわれの右腕となり、存分にその腕振るうとよかろう。期待しておるぞ。な？　よいじゃろ？」

取り扱い注意の魔王に世界征服を宣言させてしまった。
さらに、それを俺に手伝えと言う。というか、お願いされた。

でもこの子が俺の背中に隠れているうちは、世界は平和なままだろう。

魔王の宣言を完全にスルーの秦宮先生だったが、ハッと思いだしたように言った。

「東條、一番大事なことを言い忘れていたよ。咲耶様は今日からあなた達の家で暮らすことになったから。ついでに明日から信弥君と同じクラスで授業を受けてもらうことになると思う」
「は？」
「咲耶様も信弥君に懐いているみたいだし、現世（げんせ）に慣れてもらうには丁度いいじゃないか。……なんだい。親御さんから魔王について本当に何も聞かされてないみたいだね」

新たなる旅立ち（前書き）

「いいですか咲耶さん。もう桜の木の前でやったように、宇宙（げんせ）の法則を捻じ曲げてはいけませんよ」「えぇ～～～～」「えぇ～～じゃありません。それに咲耶さんは女の子なんですから、はしたないことをしてると、兄さんに嫌われてしまいますよ」「う～～ん、……わかった」「はい。咲耶さんはよい子です」

新たなる旅立ち

俺と美弥は魔王を家に連れて帰った。

道中、二人は女同士の秘密の話をしていたらしい。

話の内容を美弥に聞くと、顔を赤らめて「兄さんは不潔です」なんて言われた。

咲耶に聞いても、口止めされていたらしく教えてくれない。

なんだか仲間はずれな気分だ。

閑静な住宅街。

高い塀に囲まれた広い庭園と、その中の池には鯉まで泳いでいる豪邸は、……通過する。

お隣さんとお向かいさん、それらと一見しても違いが分かりにくい木造住宅。……我が家だ。

帰ると親父がすでに家に居た。

話があると言われて、リビングの四人がけテーブルに並んで座る。

美弥が気を利かせて麦茶をだしてくれた。

咲耶は冷たい飲み物に目を輝かせている。

「天白羽神玖珂院咲耶之姫（あめのしらはのかみくがいんさくやのひめ）様ですね。お初にお目にかかります」

「うむ、くるしゅうない。信弥のお父君であるな。我のことは、『咲耶』と呼ぶがよいぞ」

仰々しく挨拶をすませる二人。

「おい親父、こんな時間に家にいて仕事はいいのかよ」

「うん、仕事は辞めてきた」

「はぁ？」

親父もついに不況の波に呑まれたか。

「まあ聞きなさい。私もお前のお爺さんから、勇者だの魔物だのとは聞いていた。だがそんなものとは縁もゆかりもない世界で、世間の荒波にもまれながら、社畜として一生懸命に働いてきたわけだ」

しみじみと語られてしまった。

「だが今日、魔物を管理する団体から『咲耶様のお世話をする代わりに』と、多額のお金を頂いてな」

「いくらもらったんだよ」

真っ黒な政治家が放っているであろうニヤニヤとした汚い笑みを浮かべた親父は、もったいぶって言った。

「ん～～、信弥にはお金の話はまだ早いかな～～？　あえて言うなら、贅沢しても遊んで暮らせるくらいだ。そういうわけで、私と母さんは世界一周の旅に出かけてくる。いつ戻るかは分からん」

「はぁ？」

「ほら、母さんには今まで苦労をかけたし、咲耶様もここに住むことになるんだ。五人だとこの家も手狭に感じてしまうだろ？　それならいっそのこと、母さんの夢だった世界一周旅行にでも行こうかなって。ちょうど今は円高だし」

なんということだ……。俺が咲耶と出合って半日も経ってないのに。
その行動力を他の所で生かすことができれば、もっと出世できたろうに。

「生活費なんかは毎月ちゃんと振り込んで、ポストカードも送るから。そんなに寂しがるなよ」
「いや、そういう事じゃなくて……」
「飛行機の時間が近づいているし、あんまり母さんを待たせると悪いから。戸締りと火の元の確認だけはしっかりするように。美弥、信弥と咲耶様のこと……、よろしく頼んだよ」

すがるような目で親父は言った。

「はい、お父さん。気をつけて行ってきてください」

「じゃ！」と一言残して、親父は旅立ってしまった。

よく出来た妹は何事にも動じない。
一方の俺といえば、呆然とその背中を見送るしかなかった。
そして状況を飲み込めていない咲耶。
麦茶の氷を口に入れて目をギューッと閉じ、身を縮こまらせながら冷たさに耐えていた。

新たなる旅立ち（後書き）

旅立つのは主要キャラクターではなく、親だった。
という解り難いギャグです。

どうせ常世にでも旅立つんだろ？って毛ほどでも思った方は罰として最後まで読んでください。

常世《とこよ》（前書き）

現世（うつしよ）にオチル。現世（げんせ）に生きる。

常世《とこよ》

「兄さん、まずは咲耶さんの部屋を決めなくてはなりません。一階の和室を使いたいと思うのですが、どうでしょうか？」
「わらわは信弥と一緒なら、どこでもよいぞ？」
「そういうわけにはいきません。兄さんは和室の片付けをお願いします。私は夕食の用意がありますので」

はやっているらしい『ゆるキャラ』の大きなワッペンが付いたエプロンを身にまとって、いそいそと台所に向かう。

炊事・洗濯・掃除と、家事も万能の妹の意見はこの家においては絶対なのである。

「よし咲耶、美弥様からの勅命（ちょくめい）だ。和室を平定しにいくぞ！」
「おー！」

左足にへばりついてる魔王（さくや）を引きずって、普段使われていない和室にやってきた。

扉を開けると、たたみの落ちついた青い匂いが広がる。
すりガラスを障子に似せた窓がひとつあり、日当たりは良いほうだろう。
床の間にはなんだかよくわからない水墨画らしき掛け軸が飾ってある。

特に汚れているわけではないし、部屋として使う分には十分なはずだ。
だがダンボールに詰められた荷物が、五重・六重の塔を建立（こんりゅう）して

いた。

「じゃーまずは、この塔の解体作業からだな」

ガムテープで封がされてない物だけ中身を確認して、目録を箱に書いていく。

咲耶は不思議な物がたくさん出てくる箱に興味深々だった。

昔懐かしいアルバムなんかもでてきた。

これを開いてしまうと晩飯が遅くなってしまう気がする。俺はそっと箱の奥へと戻した。

昔の教科書や小さくなった古着はこの際だから捨ててしまおう。

美弥の服は咲耶が着られるかもしれないので除外する。

そんな感じで、黙々と楼閣を崩していく。

最初こそあれやこれやと騒いでいた咲耶だったが、単純作業に飽きてきたらしい。

手を動かす俺のまわりでバタバタやりはじめた。

挙句の果てには、背中に飛び乗って来たりしてやりたい放題だ。

だが肩口から顔をだす彼女の長い銀色の髪が頬や首筋を撫でていく感触はちょっと気持ちよかったりする。

「し～ん～やぁ～～ぅ～～」

だらしない語尾をかわいくのばしながら、畳の上をピンボールのボールよろしくぶつかっては別の方向へ、ごろごろと転がっている。

そんなことをしているうちに、

〈ズゴッ！〉

頭部という打楽器を打ち鳴らして、低音で鈍い音を響かせる。
その捨て身の演奏は、家の耐震が心配になるほどの振動を放って扉をガタガタ共鳴させた。

俺も小さい頃はこんな風に床に転がって頭をぶつけたことがある。

「――ぐぅのおぉぉ、ぉぉ……」

「く」の字になって後頭部を押さえながらバネみたいに伸び縮みしていた。

「咲耶、大丈夫かい？」

しばらくもんどりうっていた彼女は、目に涙を浮かべて擦り寄ってくる。

「しんやぁ～痛かったのだぁ～～。撫でてほしいぞぉ～」

言い終わるより先に、勢いよく飛びついてきた。
受け止めると予想外の衝撃に一緒に倒れこんでしまう。
放り出されないようにしっかりと抱きとめて、空いている手で頭をさすてやった。
頭を俺の胸に横たえ、体を預けてきた彼女からは心地よい重さと温かな体温が伝わってくる。

咲耶は過去を懐かしむように語った。

「……温かい。東にはよくこうして頭を撫でられたものじゃ。あや

つはすぐわらわを子供のように扱いたがる。わらわはそんなことで喜ぶような童(わらべ)では無いと言うとるに。じゃが常世(とこよ)へと還れたのは、あやつのおかげじゃ。感謝してもし足りぬ。あのあと、東はどのような生涯を送ったのじゃろうか。それだけが唯一の心残りじゃったか、もはや過ぎ去りし事。信弥とこうして逢えた事が、あやつが生きた証であろう」

咲耶の過去を少しだけ垣間見た気がした。

少し悲しそうにしている姿は儚(はかな)げで、物思いに耽(ふけ)るように胸の中で動かなくなってしまった。

朱と白の巫女装束に彩られた輝く銀の髪と整った顔立は、どこか神秘的な感じさえする。

そんな咲耶の頭を撫でてあやしながら、しばらく抱いていた……。

それにしても、咲耶はずいぶんと東さんがお気に入りのようだ。目の前にいる俺のことも見てほしい。

そこで気づいてしまった。

俺は自分のご先祖様にちょっとばかり嫉妬しているのかも、と。

たっぷりと撫でてもらえた咲耶は満足したのか、よじよじと立ちあがる。

そして、そもそもの頭をぶつける原因となった退屈について不満を洩らす。

「信弥、いつまで箱を開けて閉めてをくり返せばよいのだ？　わらわはもううんざりなのじゃ。もっと他にやることはないのか」

「ダンボールは仕分け終わったから、必要の無いやつは物置へ運ぼう。咲耶も手伝ってくれるかな？」
「うむ。大船に乗ったつもりで我にまかせるがよいぞ」
「こっち側にあるやつを二階の奥の部屋に持っていくから、この小さい方を持ってもらえるかな」

衣類が入った軽いダンボールを選んだつもりだったが、彼女はぷりぷりと怒っているようだ。

「わらわ自らが肉体労働に精を出そうというからに、こーんなちんまりとした物など運べるか。そちらの、どっしりとして重そうなのをわらわが引き受けようでわないか」

張り切る気持ちも判らなくもないが、その中には親父が使っていたであろう分厚い本が隙間なく詰められている。
小柄な彼女では持ち上げることすらできないだろう。

「ふんっ、んぬ～～。――っはあ！　はぁはぁ……」
「それは咲耶には難しいよ。ほら、びくともしてないじゃないか」

案の定ピクリとも動かない。

彼女は上下に動かせないとみるや、あろうことか今度は横からダンボールを押しはじめた。

「っぬぅ～～～～」

それでも頑（かたく）なに動こうとしないダンボール。
履（は）いている足袋が畳の目に沿ってつるつると滑っているのだ。

我が家の魔王はずいぶんと華奢(きゃしゃ)な足腰であった。

どうやっても文字通り動かせないと悟った咲耶。

使い古されたコントのような様子を、親父にも負けないニヤニヤ顔で見ていた俺と視線を合わせようとはせず、ばつの悪そうに言った。

「久方ぶりの現世(うつしよ)ゆえに、このようなことも稀に起こりえるやもしれんな……。だ、だが！　わらわも一度言うたからにはこの務め、見事果たしてみせようぞ」

言い訳がましくのたまう。

今度はその場に仁王立ちになる。

純粋な瞳が、目の前の虚空をうつす。

りょう手をゆっくりと、むねのまえで、ひろげて。

いきおいを、ツケテ。――テヲ、ウチナラス。

〈パンッ！〉

――その刹那、咲耶とそのまわりの空気が冷たく停まったような気がした。

その気配は存在を濃くして俺に迫る。

つま先から始まったソレは、足にへばり付いて舐めるように這いずり上がってくる。

残酷な世界が俺に纏(まと)わり憑いて離れない。

大事なモノを優しく包み込みように、されど固くほどけぬように、全身を縛り付けて拘束する。

幾重にも呑み込まれた後に、首を絞め上げる勢いで絡みつくソレは顔を覆い尽くして視界をさえぎる。

内側から侵食せんがため、粘着質の腕を伸ばしてくる。

なにもすることができず、肌の上で蟲が蠢きあっているような嫌悪感を耐える。

天地の感覚が無くなっていく。

落ちていく。墜ちていく。

だが上も下もない所に堕ちることはできない。

ここに居る自分の存在がどこか別の場所にオチテいくのがわかる。

オレではない、ココではない、常世(ばしょ)に。

急にあたりが明るくなったような気がする。

咲耶の柏手(かしわで)が終わった。

帰ってきたのだ。現世(うつしよ)に。

俺はおちていた。いや、もしかしたら昇っていたのかもしれない。

咲耶の拍手が響いている間、その数瞬。その音に連れ去られてしまった。

そこで、俺は気づいてしまう……。

魔王がこちらを叡覧(えいらん)していた。

微かに歪められた口もとが艶然(えんぜん)とした笑みを浮かべ、妖艶で魅惑的なその顔は何よりも美しい。

吸い込まれそうになる。

その顔に。

なにもかもを認め、――許し、――従い、――受け入れ、――差し出し、――。

「東の者よ、この程度で侵(の)食まれるでないぞ」

魔王(さくや)から聞こえたような気がしたその声は、俺の頭の中を廻り廻って、やっぱり咲耶から聞こえた気がした。

いつの間にか彼女の顔からは挑発的な微笑は跡形も無くなっていた。

そのかわりに、向日葵(ひまわり)のような満点の笑顔を咲かせてこちらを見ていた。

今のは何だったのだろう。

そんな疑問をよそに、咲耶は得意げにダンボールを掴(つか)む。

「よいか？　よ～～く、見ておるのじゃぞ」

そう言うと、さっきまで1ミリも動かせなかったダンボールを片手で摘(つま)むように持ち上げたのである！

「ほれ、どうじゃ～～。そ～～れ、それ！」

まるで綿でできたクッションを弄(もてあそ)ぶかのように投げたり、突いたり、回したり。

先ほどの臨死体験など頭の隅に吹き飛んでしまうほどに驚愕(きょうがく)した。

この時の俺は口をあんぐりと開けて、さぞ滑稽(こっけい)に見えていただろう。

してやったり顔の彼女。

にんまりとした顔でこちらを見ると、あろうことかそのダンボールを投げてきた！

「わああぁぁ！」

慌てて飛びのく。

重いはずのダンボールはふんわりと木の葉のように舞い、壁にちょこんとぶつかるとそのままずるずると下に落ちていった。

「きゃはははははっ」

腹を抱えて笑っている咲耶を無視して、そのダンボールにふれてみた。

めちゃめちゃ軽かった。

たしかに分厚い本が何冊も入ったままの、先ほど彼女がまったく動かせなかったダンボールである。

どういう事かと思案していると、ひとしきり笑った咲耶が種明かしをしてくれた。

「わらわのような者にとって物の重さなど些細なこと。わらわの意志ひとつで、羽のようにも岩のようにもなるのじゃ。この部屋にある箱はすべて軽くしておいたぞ。さぁこれをどこへ持っていくのじゃ」

俺と咲耶は中身のつまったダンボールを高く積み重ねる。

そのまま無造作に持ちあげ、悠々と運んでいった。

その様子を目撃した美弥。最初こそ驚いた表情でこちらを見ていたが、二往復目には「咲耶さんはお手伝いして偉いです」などと褒める始末。

その言葉に、咲耶はてれ笑いで答えていた。

戦慄の、あ〜〜ん（前書き）

もぐもぐ……、もぐもぐ……。

戦慄の、あ～～ん

テーブルに座った咲耶は、今か今かとそわそわしていた。

台所から次から次へと運ばれてくる我が妹お手製の色鮮やかな料理たち。

ご飯にお味噌汁から始まり、おひたし、厚焼き玉子、お刺身、天ぷら、鳥のから揚げ、ハンバーグにポテトサラダ。

香ばしくも甘い匂いが食欲をかきたてる。

美弥が配膳している間は手持ち無沙汰だったので、三人分の飲み物をついでまわる。

「ずいぶんと豪華な夕食だな」

「今日は家族が増えた記念すべき日ですから、奮発してしまいました。咲耶さんのお口にあうと嬉しいのですけど」

当の本人は、眼前の料理をギラギラとした目つきで食い入るように見ている。

何事かを尋ねられたことに気付いた咲耶は、白く長い袖で口元をごしごしと拭(ぬぐ)って答えた。

「うむ、くるしゅうない。して美弥よ、これは全部食べてもよいのか……？」

「もちろんですよ。待ちきれないみたいですので、いただきましょうか。咲耶さん、お腹いっぱい食べてくださいね」

「いただきます」と皆で手を合わせた。

いつも通り妹の手料理ほど旨いものはない。

甘くて絶妙な塩加減のふわふわな玉子に、甘辛く揚がったジューシーなから揚げ。やわらかくて中までしっかりと火の通ったハンバーグは箸を入れると肉汁があふれ出てきた。

カチャカチャと食器がぶつかる音がするので何事かと見やると、咲耶が小さな手で箸を使って食べ物をかきこんでいる。

こぼれて散らかり、世辞にもお上品とはいえない。

その様子を見かねた美弥は食器棚からあるものを持ってきた。

「咲耶さん、これを使って食べてみてはどうでしょうか」

いわゆる先割れスプーンというやつを勧める。取っ手がプラスチック製で扱いやすそうだ。

「それはなんじゃ、旨いのか？」

「これはお箸の代わりに使います。食べやすいと思いますから使ってみてください」

素直に受けとる咲耶。

訝(いぶか)しげにスプーンを見たあと、おもむろにその鉄の塊にかぶりついた。

――ガリッ。

かぶりついたままの格好で動かなくなってしまった。

その一部始終を目撃してしまい、思わず口の中のものを噴き出しそうになる。

「ゴハッ、ゴハッ。――な、なにやってるんだよ咲耶。……くっくっ、ははははっ」

耳まで真っ赤にしながら下を向いて必死に何かを耐えている。

さすがの美弥もこれには口元を隠してくすくすと笑っている。

遠慮なく笑っていたら咲耶は睨みつけられた。その後、何事もなかったかのようにスプーンを鷲づかみハンバーグを乱暴にぶつ切りにして、ご飯といっしょに口に運んだ。

「咲耶さん私が食べさせてあげましょうか。はい、あ〜〜んしてください」

「よい、食事くらい一人でできるのだ。おい。こら、よさぬか」

「私のお料理は、お口には合わなかったでしょうか……」

箸に玉子を摘(つま)みながら、ずいぶんとわざとらしく残念そうに振舞う。

「べ、別に不味いなどとは言っておらぬではないか。むむぅ、しょうがないの。い、一回だけじゃからな」

咲耶はまるで親鳥に餌をねだる雛鳥のように首をのばして玉子をついばむ。

――「あ～～むぅ」

もぐもぐ……、もぐもく……。

「――――ッ！」

玉子を与えた美弥に衝撃が走った！

「あ～～ん」する咲耶が狂おしい程にめんこいのだ。かくいう俺もその庇護欲(ひごよく)あふれる光景にただ心を奪われていた……。

あまりのかわいさに放心していた美弥は意識を取り戻すと、今度は贅沢にもエビフライを雛鳥に向かって差し出した。

「はい咲耶さん。今度はエビフライです。あ～～ん、してください。あ～～ん」

「い、一回だけと、言うたではないか……。これで最後じゃからな」

――「あ～～んぅ。あむぅ、あむぅ」

もぐもぐ……、もぐもぐ……、もぐもぐ……。

まんざらでもない様子の咲耶は差し出されたエビフライを小さなお口でぱくつく。長細いエビフライは彼女がついばむ姿を長く見せてくれた。

美弥は頬に手を当ててうっとりとその様子を見蕩(みと)れている。すでに彼女の箸には次の料理がスタンバイしていた。

――「あ〜〜むん」

もぐもぐ……、もぐもく……、――ゴックン。

「も、もうこれで、もぐもぐ……さ、さいごじゃから――」

――「あ〜〜む」

もぐもぐ……。

なんだかんだ言いつつも律儀(りちぎ)に美弥の「あ〜〜ん」に答える。

もぐもぐ……、もぐもぐ……。

――「あ〜〜ん」

「も……、もう。もぐもぐ……。ちょ、ちょと、もぐもぐ……、ま、待っ……」

「はいどうぞ。あ〜〜ん、してください」

差し出されたから揚げを頬張ってから、たまらず席を立つ。こちらに走り寄ってきて美弥から隠れるようにしてすがってきた。

「もぐもぐ……、もう、もぐもぐ……、ゴックン。よ、よさぬか。もぐもぐ……。なあ信弥、そなたからも、もぐもぐ……なにか、言うてやるのじゃ。もぐもぐ……」

もぐもぐと雛鳥が親鳥に向かって威嚇する。

助けを求められたが、俺はこの誘惑には勝てなかった。

「咲耶……。はい、あ〜〜ん」

「――――ッ！」

呆然と立ち尽くしている咲耶……。

信じていた信弥に裏切られて絶望のどん底に落ちている。

この場に彼女の味方はいなかったのだ。

しばらく動けなかった咲耶。我に返ると、再度お口をもぐもぐしだす。

――ゴックン。

そして、観念したかのように差し出されたハンバーグにかぶりついた。

「もぐもぐ……、もぐもぐ……。――ゴックン。こ、これでよいの

じゃろ……」

涙目になりながらもぐもぐする咲耶は、とても可愛かった。

征服のススメ（前書き）

魔王より美弥さんの方が怖いです。

征服のススメ

思う存分「あ～～ん」させてもらった。

あれだけあった料理も三人のお腹の中に消えてしまい、わずかに残った分をちびちびとやっていた。

お腹をぱんぱんに膨らませた我が家の魔王は椅子にだらしなく座って、満足げな表情を浮かべながらぐったりとしていた。

あの後さすがにやりすぎたと反省した。

平謝りしてると根負けした咲耶が『無理に食べさせない』という条件つきで、また「あ～～ん」をしてもよいと言ってくれた。

なんだかんだで彼女も「あ～～ん」が好きなのではないだろうか。

その証拠に残ったから揚げを目の前にもっていくと、咲耶は嬉々とした表情で飛びついてきた。

にこにことした顔をしながらもぐもぐしてからゴックンと飲みこむ。

その後彼女は「うぅ～～」としんどそうな呻(うめ)き声をあげてから、お腹をかかえて先ほどよりますます青い顔をしてよけいにぐったりとした。

美弥はそんな彼女を嬉しそうに眺めている。

「のぉ～～しんやぁ～～」

「どうした？　まだなにか食べたいものがあるのか？」

「たしかに美弥の料理はうまいが、今はもうよい。それよりも透明で冷たい飴の入った飲みものと、世界（うつしょ）が欲しいかのぉ～～」

学園で言っていたアレか……。だが一口に世界征服といっても、お菓子を買ったついでに付いてくる食玩を手にいれるようなノリで世界（うつしょ）は手にはいらないと思うぞ。

「『見返す』とか言ってたけど……、具体的に何をどうしたいんだ」

「うむ、よくぞ聞いてくれた」

待ってましたと言わんばかりの勢いで話を続けた。

「まだ魔王達（わらわ）が現世（うつしょ）を統べていた頃の話じゃ。わらわは四つの島からなるこの大和の半分を統べる魔王じゃった……」

「え～～」

思わず疑問の声が口をついて出た。

「う、うるしゃい！　――コホン。ともかくあの頃は他の魔王もわらわの強大な力に恐れをなして、手を出すどころかわらわに足を向けて寝ることもできなかったのじゃ。じゃから奴らを見返し、力を誇示するためにてっとりばやく世界征服するのだ！」

言い張る彼女だったが、半分とか足を向けての部分はかなり怪しい

ところである。

「はい咲耶さん。氷の入った飲みものです」

先ほどの要求の片方をこれで満たしことになる。

魔王様に捧げられた飲みものからは、じゅわじゅわと泡が吹きだしていた。あれは冷蔵庫に入っていた○イダーだと思う。

熱くもないのに泡が出ている不思議な水に、咲耶は身を乗りだしてひどく興奮している。

美弥はこのあと起こるであろう出来事に息を荒くして、期待の眼差しを向けている。

ごっくん……。

「ぎゃあああああ！」

――そんな咲耶を尻目に、俺は和室での一件を思いだしていた。

咲耶の不思議な柏手とそれによって起こった魔王の御業。

口からサ○ダーを吐きだし、悲鳴をあげて部屋の中を走りまわってる彼女がその気になれば、俺の知っている人間の世界を征服するという漠然とした内容の夢物語が現実のものとなってしまうかもしれない。

もしかしたら俺が咲耶に冗談のように言った一言で、世界が滅ぶ。
自覚してしまうとちょっとだけ怖くなってしまう。
だがひぃひぃ言いながら戻ってきた彼女を見てしまうと、そんな考えは杞憂だったかもしれない。そう思える。
しかしながら、一連の騒動を悦とした表情で見ている美弥だけは怒らせちゃいけないと確信した。
「ぬぁんじゃこれは！　口が焼けてしまったかと思ったぞ！」
「サイ〇ーってのはそういう飲み物なんだよ。慣れるとそれが癖になったりするんだ」
「もう大袈裟よ咲耶さん。そうだ、今度はこれを使ってみたらどうでしょう」
そう言って取り出したるはストロー。サイダ〇のコップに入れると氷が心地いい音を響かせた。
「なんじゃこれは？」
「これを吸うとですね、なんとその下の飲み物を飲むことができるんです」
咲耶は先ほどの失態を払拭するかのように、無駄に尊大な態度で言う。
「ふふふ……、美弥よ。いくらわらわが現世（うつしよ）に疎いからというても

そのような世迷言を信じるわけがなかろう。……よろしい。そのような絵空事など無いことを、我が身をもって証明してやろうではないか」

自ら断頭台に立った彼女は、神妙な面持ちでストローに口をつけ、――思いきり吸った。

「ぎゅあああああ！」

一切の遠慮なしに吸いあげられた冷酷な炭酸は口内の奥深くまで侵食し、その幼い柔肉に執拗なまでに鋭い刺激をあたえる。

「あああああ！」

いたいけな子羊は痛みの矛先をもとめ無自覚に彷徨いだす。

「おおおおおっ――ッ！」

逃避行を続ける爪先が立ち塞がる壁に激突する。

「ふんぎゅあ、へぶちっ」

這い上がってくる雷の如き衝撃に、制御を失った幼体は無様に地を這った。

「ひぎゅ、ひぎゅ、ひぎゅ、――」

もはや絶え間なく押し寄せる鈍痛を耐え忍ぶしかない。

つまりストローで思いきり吸った炭酸に驚いて暴れまわり、足の小指をぶつけた拍子に転んだわけだ。さすがにこれは同情せざるをえない

そんな原因を作った張本人である俺の妹は、聖母のような慈愛でもって悲劇の魔王に手を差し伸べた。

「――咲耶さん、痛かったですよね、苦しかったですよね。でももう大丈夫です」

「みやぁ、うわわわわわぁぁん」

ぴったり抱き合って労(いた)わり合う二人。

悲しんでるいる咲耶に、嬉しそうな美弥。これじゃどちらが魔王だか判らなくなってきそうだ。

ぐずぐず泣いている子羊(まおう)に、聖母美弥が頭を撫でながら優しく仄(ほの)めかす。

「痛いのは治りましたか？」

「うん。ありがとうみやぁ。おぬしのおかげなのじゃ」

いや、そもそも事の発端は……。

「咲耶さんも人にいっぱい感謝されるような、立派な魔王様になりましょうね」

「そ、そうしたら、わらわはこんな辛い目にあわずにすむのじゃろ

うか……？」

「もちろんです。そうなったらみなさん咲耶さんのことを可愛がって、世界征服だって出来てしまうかもしれませんよ」

「――っ！　わかったのじゃ……。わらわの進むべき道が、見えた気がするのじゃ……」

どんな道なんだよ……。果てしなく険しそうだな。

「どうやったら立派な魔王になれるんだ？」

ため息混じりに聞いてみる。

「兄さん、ボランティア部なんてどうでしょう？」

「なんなのじゃ？　それは」

「世の為、人の為になる事をする所ですよ」

こうして、ボランティアで世界征服への幕が切って落とされたのである。

お風呂―Ｃａｕｔｉｏｎ―

咲耶と一緒にお風呂に行ってくるぜ♪

「咲耶さん、そろそろお風呂に入りませんか？」

美弥が唐突に言い出してくれた。（ｇＪ）

「な、なんじゃ美弥よ。藪（やぶ）から棒に」

「だって咲耶さんあっちこっち汚れてしまっています。そんなことでは立派な魔王になることなんて出来ませんよ」

「わ、わらわのようなやんごとなき身分の者に、そ、そ、そのようなことは、か、関係ないのじゃ！」

おかしい……。

今日一日中落ちつきのない咲耶だったが、輪をかけて浮き足立っている。

これはナニかあるな。

「そんなことを言っていると、兄さんに嫌われてしまいますよ」

「――っ！」

その一言に肩を震わせて反応した彼女は泣きそうな目でこちらを伺う。

「の、のぉ信弥よ……。そ、そ、そなたは、風呂に入らぬわらわは……、嫌いになると申すか？」

俺は瞬時に思考を張り巡らせた！

（飛ばしてもいいです）

（この様子から察するに咲耶はずばり風呂が嫌いなのだろう。魔物――咲耶は魔王だが、に風呂に入る習慣どころか獣のようなものを連想する魔物という言葉の響きから身嗜（みだし）みなどという概念があるかさえ微妙だ。桜の前でであったときもお世辞には綺麗とはいえなかったし。考えてみれば大昔には風呂に毎日入るなんて習慣はなかったはずだ。さすがの魔王だけあってそれなりには小奇麗にしてたみたいだが。それを踏まえて、もしここで「そんな事は無い」と言った場合はどうだろう。直前の会話から鑑（かんが）みるに咲耶は俺の意見を重視するだろう。風呂が嫌いであろう彼女のことだから俺が入らなくても気にしないと言えば恐らくは入らないだろう。しかしそのような事態になっては前書きで読者様に宣言したことが果たせなくなってしまうではないか！　もはやこの答えはあえないな、論外だ。俺的にも一日中騒いで埃まみれの巫女服でべたべたたされるのはちょっと遠慮したい。まぁこんなことは解り切っていた事だろうしアレだけ前置きしておいたにも関わらず今現在この箇条書きを目で追ってる読者様にもそのような事を期待される方は誰一人として居ないであろう、と俺は確信している。では「気にする」といた場合だ。というか「気にする」と言います。そうでなくては始まりません。ではなにが問題かというと俺が男で咲耶は女？である事だ。？なんて付けてはいるが別に咲耶が女であることを疑っている訳ではない。ただ俺は咲耶は人間ではなく魔王様であると言うことを表現したくて？を付けたのだ。敬虔（けいけん）である大変ありがたい読者様にはなにを今

更と言われるかも知れないが咲耶は美少女である。私の拙い表現力で出来るだけ精一杯に描写していたつもりである。何度も可愛い可愛いって言ってきた。しかもロリっ子なのである。しっかりロリっ子なのである。大事なことなので二回言った。さらに巫女装束でリアルではありえない銀髪ロングで二次元だからこそ許されるドジっ子と魔王というテンプレ的属性を持つスーパーヒロインなのである。ここまで書いて作中での咲耶に対する好き好きオーラがちょっと足りない気がしてきたので次からは気をつけようと思う。なにが言いたかったかというと、――咲耶とお風呂に入りたい。……ちょっと興奮してしまったが話を元に戻そう。つまりだ、俺と咲耶は性別が違うワケ。それがなに？って思われるかもしれないがとても致命的である。なんといっても我が家には良く出来た万能妹が居る。そんな彼女がロリっ子とお風呂なんて許してくれると思うか？いいや、おれは思わないね。だから素直に「気にする」と言ってはダメなんだ。解ってくれたかな？　さて、そこでどのようにしたら美弥を納得させてロリっ子と一緒にお風呂に入れるかという話に戻そう。ここで注目すべきは咲耶は俺のことをすごく意識してるって事だ。これを上手に料理して美弥を納得させた上で悠々自適にロリっ子とのお風呂を楽しむというのをベストな結果として考えていきたい。なんなら美弥と一緒に３Ｐでも俺はかまいませんよ？まったくの箇条書きなので話が飛んで申し訳ないがどうしたら咲耶と、って事だったな。俺も今から考えるぞ。――――こういうのはどうだろう。咲耶から俺と入りたいと言わせるのは。これなら俺がしょーがないなーって言いながらキャッキャうふふできると思わないか？　俺から言い出せない以上そうするしかあるまい。じゃ具体的になんと言おうか。ここで咲耶の気持ちになって考えてみようじゃないか。咲耶は俺と一緒に入りたいはずだ。まちがいない。じゃ俺もそれを匂よわせるような発言をしたら咲耶の方から誘ってくれるのではないか？　完璧じゃなイカ？　よしこれでいこう。では具体的にこういうのはどうだろう。「やっぱり気にしちゃうかな……。咲耶の長くて

綺麗な髪がもったいないよ。俺がお手入れしてあげたいくらいだ」
ぶっつけ本番で考えた割にはけっこういい線をいってないか？　直接言う訳ではなく、それでいて咲耶と一緒に居たい。面倒を見させて欲しい。髪を洗いたい。お？　お？　じゃーこれで逝きます。）

（お疲れ様でした）

――――嘗（かつて）てないほどの脈動を見せた俺のシナプスが時空を超え、俺は一つの未来（こたえ）を導き出した。

それを俺は提示しよう。

「やっぱり気にしちゃうかな……。咲耶の長くて綺麗な髪がもったいないよ。俺がお手入れしてあげたいくらいだ」

よし、言ってやった！　完璧。後は二人がどう出るか……。

「う、うむ。わらわもこの長い髪は自慢なのじゃ。し、信弥がそのように思うてくれていたのは、なんだか恥ずかしいの」

「もう兄さんったら。でもその気持ちもわかります。咲耶さんの長くて艶のある綺麗な銀髪は女性の私から見ても憧れてしまいます」

美弥は咲耶の長い髪を手櫛（てくし）で整える。咲耶は上機嫌だ。

「な、なあ信弥よ。そんなにわらわの髪を気にいったのなら……。い、いっしょに――」

キタ――（゜◇゜）――――！！！！

これで勝つる！
が、しかし。

「――――ダメですよ咲耶さん」

「――ッ！」「――っ！」

俺は青い顔をして、咲耶は赤い顔をして。

この家の裁定者であり、執行者であり、断罪者である美弥の、次の御告げを待った。

「兄さんもです。二人でお風呂なんて言語道断です。見過ごす訳にはいきません」

なんということだ……。

でも薄々こうなるんだろうなとも思ってた。

桃源郷には誰もたどりつけないのである。

「しかしですね、咲耶さんが一人でお風呂というのは色々と心配ではあります」

――え？

絶望の暗闇の中から、一筋の光が差し込むかのように――。

「――ですので私が咲耶さんと入ります。さあ一緒にお風呂に行きましょう」

終わった。

まさにオワッタ。

俺の聖戦（ジハド）は終わりを告げたのだ。

無駄にキーボードを叩いただけだったのだ。たたいただけだったのだ。た、が多い。

おれはこうして戦いに敗れ去った。

視界が暗転する。

そう、俺の役目は終わったのだ。

みんなを理想郷（アルカディア）に導くことが出来なかったふがいない俺を許してくれ。

後は……。

――――「咲耶さんの巫女服は、なんというかすごいですね」

美弥は咲耶の着ている巫女装束をあらかた脱がしきった。

「これは手洗いしないといけませんね。生地の量も多いですし……。乾かしている間は申し訳ありませんが咲耶さんには私が昔着ていた服があったと思うので、そちらを着ていただくことになるかと思います」

脱がしている最中の咲耶はまるで借りてきた猫のように大人しくしていた。

これから起こるであろう苦行を想像しただけで身の毛がよだつ思いだった。

実際彼女の柔らかくきめ細かい肌に似つかわしくない鳥肌がぽつぽつと出来ている。

「もう咲耶さんそんなに緊張しないで下さい。私まで緊張して来てしまいます」

「し、し、し、しかしじゃな。わらわといえども、こ、こ、こ、このようなことは、なれておらぬゆえに――」

「私が一緒ですので大丈夫です」

どこが、とは言わないが色々と貧相な魔王の生まれたままの姿を露(あらわ)にさせた美弥は、今度は自分の番とばかりに上着に手を掛け一息に脱いだ。

どこが、とは言わないが脱ぐ際に上に引っ張られたものが重力に従って落ちていく。

その反動で自然の摂理に逆らい上へ、そして下へ、リズミカルにバ

ウンドする。位置エネルギーと運動エネルギーの交換が収束していく。

その一部始終を見上げていた咲耶の顔は敗北の色に染まっており、その揺れと同じ軌道を描いていた。

前屈みになり極端に布面積の少ない服を外すと、咲耶の自尊心はズタズタに切り裂かれた。

「咲耶さん、こちらをじっと見ていったいどうなさったんですか。恥ずかしいのであまり見ないでください」

腕を胸の前で組んで身をよじる。

咲耶は失格していた。試合は始まってもいなかった。諦める以前に同じコートにすら立たせてもらえないのである。

なにが、とは言わないが大きいほうがぺったんこの手を引いて桃源郷へと足を踏み入れる。

勇者が探し求めた理想郷（アルカディア）の地だ。

浴槽のふたを取ると熱を孕む湿気があたりに立ち込める。

夜はまだ肌寒い季節。お風呂場の二人の白い肌を心なしか暖めてくれた。

「まずは掛け湯をしなくてはいけません。こちらへどうぞ」

「う、うむ。そ、そっとじゃぞ。そっっとやるんじゃぞ。よいな」

「ふふ、わかっていますよ」

つるん、とした体の、つるん、とした肌に生暖かいものがかけられていく。

「――はぁうん。あ、あ」

「はい我慢できましたね。次は反対側ですのでくるっと回ってください」

言われたとおり薄い体を回れ右させるぺったんこ。もちろんなにが、とは言わないが。

滝のような掛け湯が終わった。今度は美弥の体にお湯が掛けられる。

天界の湖や下界の林もなんのその。山を越え、谷を越え、冷えた体を温める。

「それでは入りましょう」

美弥は咲耶の小さな手をとり大海へと優しく導く。

すらりと長い脚が片方だけ優しくそっと差し入れられる。

続いて短く細い脚がおっかなびっくり海に沈められるが、海底まで届かない。

波打ち際で尻餅をついてしまう咲耶。

美弥はそれに合わせる様にして海沿いに腰を下ろす。

その姿はまるで鳥取砂丘と松島であった。

二つの全く違う大和風景が一つの海岸線に姿を見せたのだ！

松島には豊かな自然が広がりたわわに実った果実がある。そこでは桃やメロン、イチゴが実っている。

一方の鳥取砂丘には、――なにも無い。

鳥取砂丘といわれている所は実はそんなに広くない。小さいのだ。さらにいうと砂丘というだけあって一応の起伏もちゃんとある。よかったね。もっといえば長芋なんかは有名な特産品だったりする。

砂丘の畑に行けば長芋が埋まっているんですよ。長芋が――、砂丘に――、埋ま――。

松島は砂丘の手を取ってゆっくりと湯船に浸かる。

目を閉じてじっと耐える咲耶を美弥は両手で優しく包みこむ。

「咲耶さん、そんなに怖がらないでください。私がついていますよ」

素直に腕の中に抱かれた彼女はここに来てようやく落ちつけた気がした。

――全身を包む暖かな流れに身を任せる。

「うむ、風呂というのも存外悪くないの。美弥がどうしてもと言うならまた入ってやらんでもないぞ」

「はい、その時はおねがいします」

同衾（前書き）

兄さん、大好きですよ。

同衾

俺と美弥は揉めていた。

いや、正確には咲耶と美弥が揉めていた。

話は十分ほど前に遡(さかのぼ)る――。

俺は風呂で一日の汗と疲れを洗い流す。紆余曲折あって俺が二人の後に風呂に入る事になった。

俺としては咲耶と裸と裸のお付合いをしてもよかったのだが、世の中そんなに甘くない。

現実は厳しいのだ。

いつもより少しお湯の減っていた浴槽に悔しさを覚えつつ手早く体を洗う。

――リビングへと戻ってきた。

「おかえりなさい、兄さん。お湯加減はいかがでしたか？いつもより残ってるお湯が少なかったかもしれません……。大丈夫でしたか？」

「悲しみの涙と深い絶望に肩までゆっくりと浸ることができたよ」

「……？」

美弥はいつもの白い布地に赤いチェックの柄が入った、特徴が無いことが特徴のパジャマ。

だが良く出来た妹が着たパジャマというのは、それだけで理屈ではない超自然的な価値がでてくる物なのである。

それはそうと、もう一方のちびっ子が着ているあれはなんだ？

ぶかぶかのYシャツ、だと……。似合いすぎだろ……。

まさか美弥がこのようなチョイスをしてくるとは。よく解っていらっしゃるじゃないですか。

リビングのソファーで大人しく座っている咲耶のしっとりと流れる銀の絹糸のような髪を美弥は櫛（くし）で丁寧に紡いでいく。

春の夜陰に少しだけひんやりとした静かな空気の中、髪から伝わる美弥の暖かさを感じてか咲耶はこくりこくと舟をこいでいる。

そんな二人を横目に見て、冷蔵庫からよく冷えたじゅわじゅわ泡の出ているアレを取りだし、風呂あがりの熱く火照った体に流しこんだ。

「――んぐ、――んぐ、――ンぷはぁ！」

弾けるような快感がのど奥を突きぬけて暴れまわる。生き返るとはまさにこのことだ。

「もう兄さんったら、だらしないです。もう少し上品に飲んでください」

しょうがないですね、といった感じの我が妹の意見はもっともであるが、こういうのはなかなか止められない。

兄妹のいつものやりとりで目を覚ましたお姫様は俺の姿を確認すると、こちらに近よってきて体にしなを作り言った。

「どうじゃあ信弥よぉ。高貴なるわらわの美しくも艶(あで)やかなこの姿は」

どう、って……。その流し目が痛々しいです。

うっふんとか、あっはんとかされても正直反応に困る。もう少し大人になってから……――ん？

咲耶が前かがみになり、頭部とヒザに手を当てながら胸部の洗濯板を強調していた時。

気づいてしまった。

ぶかぶかの白い聖衣の襟元(えりもと)からのぞく小さな桜の花びらを。

「お、おおぉ……。――か、かわいいんじゃないかな……」

嘘は言ってない。声がちょっとだけ上ずった気もする。

「む～～ん。そーではない。わらわがかわゆいのは解りきっておる

のじゃ。今は我にこーふんするのかと聞いておるのだ」

「――す、するする。こーふんしちゃうかな～～」

「おお！　そうかそうか。では思うぞんぶんわらわで楽しむがよいのじゃ。ほれ、――それ、――これでどうじゃ。――こんなのもあるぞ」

のりのりでくねくねする咲耶を上から覗きこむようにさりげなく、ごくさりげなく移動する俺の行動に対して敏感に何かを感じとった美弥が待ったをかける。

「咲耶さん。明日は朝から学園に行かなくてはいけないのですからもう寝ましょうか」

チッ！　と心の中で舌打ちをする俺。さすがよく出来た妹は勘も鋭い。

「そうか。でわ信弥よ、そなたの床（とこ）に案内するのじゃ。わらわもそこで寝ようぞ」

一瞬何を言われているのか理解できなかったが……。そうか、そんなイベントも残っていたんだな。

俺も君とおねんねしたいと心から思うぞ。別に変な意味じゃなくて。だがな咲耶よ、東條家において物事を決定するのは俺じゃないんだ。

「そうだね、一緒に寝ようか。ついておいで咲耶」

「うむ！」

「……兄さん？」

いつも誰にでも分け隔てなく向けられる柔らかな微笑み。

人の心の中にするっと入っていく、そんな笑顔をしている美弥の、そんな彼女の目は、――笑っていなかった。

「ウソデス、チョウシニノリマシタ」

「はい。兄さんは冗談が上手いです。咲耶さん、今晩は私と一緒に寝ましょうね」

「えーー、今しがた一緒に寝るって約束したのじゃ」

「だめです。咲耶さんを兄さんに預けるわけにはいきません」

「いやじゃ！一緒に寝るのだ」

「いけません。兄さん、いいかげんにしてください」

「何で俺が……」

「元はといえば兄さんが――」

「信弥と一緒に寝るのじゃ！」

――――とまあ、こんな具合だ。

俺はこうみえて聞き分けがいい。ちゃんと判っていた。

すこしだけ調子に乗ってしまったが、もう許してほしい。

これ以上美弥の心象を悪くするとなにが起こるか判ったものじゃない。

俺だけ朝ごはん出てないとか普通にありそうで怖い。

「咲耶、今日は美弥と一緒に寝るんだ」

「むぅーーん。信弥までそう言うのか」

「兄さんもそう言っています。行きますよ、咲耶さん」

「んむぅ」

しぶしぶといった様子で咲耶はドナドナされていった。

美弥のあの様子から察するに、あしたの朝飯は無事であろう。口は災いの元とはよく言ったものだ。

しかし桜の花びらが見えてしまったのは役得だったな。下着がないのは仕方ないか。

……ん？　上は無かったのは確認したが下はどうだったんだろう。

も、もしかして……。

――な、なんてな～～。まさかそんなことがあるわけが、ない、よな？

さて……、俺もそろそろ寝ようか。

今日はいろいろあった。

魔王がいきなり現れて、俺のご先祖様が勇者で、世界征服だ。

親父とお袋は急に海外旅行に行ったし、臨死体験もしたっけな。あれは衝撃的だった。

だがこんな日常も悪くない。

咲耶とならこれからも楽しくやっていけるだろう。たぶん……。

先に階段を上がった二人の後を追いかけるように二階の自室へと向かう。

そこには俺の部屋の前には美弥が仁王立ちしていた。

その表情は闇に融けこむようにして窺(うかが)い知ることは出来ない。

「兄さん。いったいあれはどういう事なんでしょうか。納得のいく説明をおねがいします……」

美弥が指差す方向は二階の物置。

はて……、あそこには和室の荷物を運んだだけだったが。

促(うなが)されるまま物置の中を覗き込むと、ダンボールの中身がそこらじゅうに散乱してそれはもうひどい有様だった。

「たしかに和室の荷物整理をおねがいしました。でもこんなに乱暴に扱うなんて見損ないましたよ、兄さん」

「え……、でも確かにしっかりと積み上げておいたはずなのに」

そこまで言ってから俺は嫌な予感がして、床に転がっている中身がまだ出ていないダンボールの重さを確認してみた。

「――ッ！」

重い。

いやいや、本来ならそれが正常なのだがこれは魔王(さくや)の御業によって軽くなったはずじゃ。

俺と咲耶はただ運ぶだけではつまらないので、途中からは箱を投げて遊びながら運んだり、物置の中でどれだけ高く積めるか咲耶と競いあったりした。

もちろん身長のある俺の圧勝だったが。いや、今はそんなことよりこの惨事がいったいどういうことなのか。

そこで俺は、美弥の部屋から顔だけ出してこちらを覗いている共犯者を見つけた。

「すまんの信弥よ。あれは時がくれば元に戻るのじゃが、言い忘れておったわ」

――パタン。

言い終わると、静かに部屋のドアを閉め、それっきりだった。

裏切りやがった……。

さすが魔王だ。

こんなに汚い奴だとは思わなかった。

だがうちの妹にそんな事情は全く関係ない。

「咲耶さんも悪いかもしれませんが、これはちゃんと確認しなかった兄さんの責任です。後片付けが終わるまで寝てはいけませんよ！
いいですね、兄さん」

「え、あ、あの、ちょ……」

言い訳する間もなく部屋に戻った美弥。その表情は最後まで判らなかった。

明日の朝飯、俺の分はあるのかな……。

――――咲耶さんは私のベットの中で丸くなっていました。

私もその可愛い魔王さんの隣にお邪魔します。

彼女はじっとして動きません。
きっと怒られると思っているのかもしれませんね。
でも私はこらえていた笑いをこれ以上隠し切れませんでした。
「うふふふ、あはははは」
彼女はようやくこちらを振り返り、私の顔色をうかがいます。
笑っている私を見て、咲耶さんは正直に話してくれました。
「あれはわらわが信弥と一緒にやったことなのだ。わらわも悪かったのだ」
半分泣きながら告白する彼女が可愛いのでついつい頭を撫でてしまいます。
「話していただきありがとうございます。初めから判っていましたよ。でも兄さんにはお仕置きが必要なんです。これに懲りて反省するといいんです」
私が怒ってないことが判ると、彼女はお布団の中をもぞもぞとこちらに移動してきました。
抱きしめられてしまいます。
「……暖かい。こうしていると昔を思い出すのじゃ。美弥よ、今日はずっとこうしていてもよいか？」

「はい。わたしもなんだか懐かしい感じがします。今日はいっぱい甘えてください」

「うむぅ……」

私の胸の中で眠る小さな魔王さん。

可愛らしい寝顔をこちらに向けてすやすやと寝入ってしまいました。

私もこの子の寝顔を見ていると安心してしまいます。

物置からは兄さんの後片付けの音がわずかに聞こえてきます。

あれだけ散らかっていたのにぜんぜん音がしてこないのは、兄さんが気を使ってくれているからなのでしょう。

少し可愛そうなことをしてしまいましたが、兄さんは甘い顔をするとすぐに付け上がってしまいますからこのくらいが丁度いいのかもしれません。

なんだかんだ言いつつ、優しくて素敵な――自慢の兄さんです。

おやすみなさい。兄さん、咲耶さん。

初登校（前書き）

違うぞ、待ってくれ。誤解なんだ、信じてくれ！

初登校

俺は朝食を食べている。

それ自体はごくごく一般的なことかもしれない。

だが俺にとっては栄養摂取という名目以上に、美弥様のご機嫌というかけがえの無いものを大根の漬物と一緒にバリボリと噛み締めている。

今日から学園の通常授業が始まる。

いつもは憂鬱だった毎日が、長い休みが開ける頃には楽しみになってしまうから不思議だ。

「咲耶は今日から学園に通うんだろ。これからどうするんだ？」

「秦宮先生から連絡を頂いています。いろいろ準備があるそうなので、少し早めに学園にいらしてほしいとの事です」

「学園とは何をするところなのじゃ？　わらわにも教えてたもれ」

もっともな意見を言う咲耶。

「みんなで集まって勉強するところかな。他には友達とご飯を食べたり遊んだり」

いざ説明しようと難しいもので、これ以上の言葉が出てこない。

「なんと、信弥たちは貴族だったのじゃな。道理でこんなに旨い物が出てくるはずじゃ。じゃが手伝いの者の姿を見かけぬが雇ってはおらぬのか？」

「ん？」

さすがに大昔の魔王様と現代っ子の俺ではカルチャーギャップがあるのだろう。彼女の言っている意味がよく判らない。

困惑気味の俺に出来た妹が助け舟を出してくれた。

「私達は貴族なんかではありませんよ。学園には大勢の方が通っていらっしゃるので、特別なことではないんです。ですので、お手伝いさんも居ません」

なんとなく納得したような咲耶。今は朝食に夢中なのか、それ以上深く追求しては来なかった。

俺と咲耶は先に家を出る。

咲耶は綺麗になった巫女服に身を包み上機嫌だ。

最後に戸締りと火の元の確認をしてきた美弥が出てくる。

「お二人ともおまたせしました。では学園へ行きましょうか」

学園へと向かう道のりで、同じ方向へとむかう方々は咲耶の愛くるしい姿に目を奪われていた。

長い銀色の髪を揺らして歩く彼女は注目の的だ。
朱と白の巫女服もかなり目立だっておりコスプレと思われても仕方ないだろう。
早い時間に出てきて正解だった。
そんはことを知って知らずか。道中相変わらずなにかにつけてべたべたしてくる咲耶だったが、人通りが多くなると急に大人しくなってくれた。

学園に入るなり、そのまま一直線に職員室に滑り込む。
二年学年副主任である秦宮真理子先生が俺たちを迎い入れてくれた。
「よく来たね。それにしても結構目立ってたじゃないか。よ、有名人！」
「やめてください。教室に行ったらなんて言われるか……」
「あはははははっ。でもまあこんなに小さくて可愛い子を連れているんだから少しくらい我慢しなさいな。じゃ早速用意してある制服に着替えてもらおうかな。美弥君も手伝ってくれたまえ」
職員室の中に併設された、給湯室と書かれたプレートが飾られている個室に二人を案内する秦宮先生。
当然のように三人の後を付いていく俺。

秦宮先生と美弥が一緒に振り返り、ジト目で呆れたように言う。

「あんたね、さっきの話を聞いてなかたのかい？　まったくこんなことじゃ美弥くんも相当苦労させられてるんだろうね」

「そうなんですよ先生。兄さんのデリカシーの無さには困ってしまいます。いいですか兄さん、私達はこれから咲耶さんを制服に着替えさせるのですよ。そこに兄さんが居ると着替えさせることが出来ないじゃないですか」

「そういうことだ。ここはもういいから、あんたは先に教室にでも行って大人しく授業の予習でもしてな」

放り出されるようにして追い出されてしまった。

これ以上ここにとどまっていても仕方ないので、重い足取りで教室へと向かう。

そして案の定、こんなに早く来ている物好きのクラスメイトたちに質問攻めにされた。

「ねえ東條君あのちっさくて可愛い子は誰なの？」「あの巫女服はコスプレなの？」「おい東條てめぇ今朝のあれは何だ」「もう一方のスタイルいい子も東條君のコレなの？」「え、なにそれ二股？」「やだ、東條君さいてー」「爆発しろ」「すっごい可愛いかったよね」「あの子は知り合い？」「東條君って大人しそうな顔して意外とやることはやってるのね」「あの子紹介してよ」

ひどい言いようである。

とりあえず一緒にいた妹のことは言っておいたが、咲耶のことは言葉を濁してはぐらかした。

「神様です。いいえ、国際的には魔王なんです」なんて言ってみろ。この場にいる全員を白い目にして黙らせる自信がある。

だがこれからの学園生活のことを考えると上策とはいえない。

それに咲耶をどのような扱いにするのかを全く聞かされてなかったのだ。

下手なことを言って話が食い違いでもしたら後々面倒だからこうするしかなかったのだ。

最も肝心な俺と咲耶の関係をはぐらかしながら適当な返事ばかりする俺に、クラスメイトはますます質問を浴びせ続ける。

一番後ろの席だった俺の周りには容赦なく人が詰め寄せていた。

ほとほと困り果てていたときに、救いの女神が手を差し伸べた。

「みんな、東條君が困ってるじゃない。それくらいにしてあげましょう」

大人しそうでいながら凛とした瞳ではっきりと訴える彼女は、腰まである長い髪を揺らしながら人ごみを掻き分けて進んで来る。

童顔ではあるが清楚な感じのする整った顔をやや歪ませて、ようや

く俺の座っている机の前までどうにかしてやってきた。

その動作の一つ一つに気品が感じられた。

そのままの勢いであたりを一睨み利かせる。

すらりと伸びた腕を払うように動かしてから、改めて言い放った。

「もうすぐＨＲが始まりますよ。皆さんは席に着いてください。はい、散って、散って！」

彼女が俺の周りに群がる生徒の塊を徐々に追い払ってくれた。

まっすぐ切り揃えられた長い髪が目の前でゆらゆらと揺れて、ほのかに甘いに匂いがする。

そうだ、彼女はクラス委員長だ。

あれは今でもはっきりと思い出すことが出来る……。

――どうしてこんな面倒くさいものを一番最初に決めなくてはいけないのかと、誰もが疑問に思うクラス委員長。

俺は無理。私は無理。誰かやれよ。

皆が下を向いてまるでお通やなにかのような空気の中において、颯爽と手を上げて立ちあがり立候補した。

その勇気ある行動に、静まり返ってきた教室はとたんに色めき立つ。

救世主が現れたぞ！

満場一致で承認された彼女の戴冠（たいかん）は、やかましいほどに鳴り止まぬ拍手でもって祝福された。

あえていうなら、俺などではなく彼女こそが勇者にふさわしい人物なのであろう。

当時の様子をT．S君が振り返ってくれた。

「もうだめかと思いました。誰もが諦めそのまま時間ぎりぎりになるまで座らされた挙句、悪魔のクジによって約１／４０の確率でこの一年を先生方に奴隷のようにこき使われ、面倒ごとをまる投げされて、あだ名は強制的に『委員長』になる。そう覚悟しました。ええ、もちろん私もそう思っていましたとも。でもそんな時に女神……。そうですとも、まさに女神です！　女神がこの絶望の暗闇の中から我々を救い出してくれたのです！　私達は盛大な拍手で彼女を讃えました。長く美しい黒髪を伴って壇上へと上がる彼女からは後光が見えたような気さえします。あまりの美貌と気高い品格に目が離せなかったですね。彼女のおかげで他の委員決めも時間内に滞りなく終えることが出来きましたよ。そのあとの妹との待ち合わせにも遅れずに済んで、彼女には本当に感謝しています」

――こんな声もあるくらいだ。

名前は覚えてるぞ。

戴冠式のときに調子に乗った男子どもが彼女の名前を連呼していた。

当の本人は顔を真っ赤にしながら必死に「止めてっ！」と叫んでいたが。

たしか――《しおり》だったかな。

あれだけあった人垣が俺の周りからすっかり無くなったのを確認すると、例の女神が話しかけてきた。

「大丈夫だった？　東條君。みんなはすぐ調子に乗るんだから、まったく困ったものよね」

「ありがとう。おかげで助かったよ、しおりさん」

「あら、話したことも無いのに『しおりさん』だなんて……、ずいぶんと馴れ馴れしいのね。もしかして女の子の扱いに慣れているとか？　さっきの二股ってのも案外本当なのかもしれないわね」

「ごめん……確かにその通りだったかも。でも苗字を思い出せなかったんだ」

「みんな『委員長』って言ってるのだから、あなたもそう呼んでかまわないのよ？　やっぱり女の敵なのね。注意しとかなくちゃいけないわ」

からかうようにして言う彼女に降参するようにして手を上げる。

そんな様子の俺を楽しそうに観察していた彼女は、どきりとするような怪しい表情を浮かべた顔を急に俺の目と鼻の先まで近づけて、俺にだけ聞こえるような声で囁(ささや)いた。

「冗談よ、あなたとはもっと親しくなりたいと思ってるの。……本当よ？　だってあの魔王様のことだってあるじゃない？」

「――ッ！」

ゆっくりと、顔を離した彼女は嘲笑（あざわら）うかのような顔とコロンの香りを残して自分の席へと戻っていく。

唐突に言われた『魔王』という言葉と残り香にドキドキしてしまい、黒く長い髪が揺れている後姿に声を掛けることができなかった。

そこにタイミングよく先生が教室へと入ってきてしまい、彼女に話を聞くタイミングを完全に逃してしまう。

どういうことだろう。なぜ彼女は咲耶の正体を知ってるんだ。

考えても堂々巡りで答えが出るはずも無く、先生の話が頭の右から左に流れていくだけだった。

「じゃーみんなお待ちかねの転校生を紹介するぞ」

先生の一言で我に返った。教室には歓声が沸き起こっている。

咲耶は俺のクラスに編入するとは聞いていた。無難に転校生ということだが一体どうなることやら。

「判ったからお前ら落ちつけって。いいか、彼女は帰国子女で日本のことはあまりなれていないそうだから、何か分からないことがあったら優しく教えてあげるんだぞ」

『彼女』という言葉を聞いて、転校生が今朝の少女ということが確定してますます騒ぎ出す野郎ども。女子もそれに便乗して転校生について話している。

「お前たち、こんなにうるさいと転校生を呼べないだろ。さっさと黙りなさい」

――その瞬間ピタリと騒ぎが止んだ。素晴らしい一体感であった。

そんな様子に半ば呆れ気味の先生は、教室のドアの向こうに居るであろう転校生に向かって声を掛けた。

「じゃあ玖珂君、入ってきなさい」

そう先生が言い終わると、静かに教室の前の扉が開いた。

――開いた。

――開いたが……。

真新しい制服に身を包んだ咲耶が登場し、教壇の前までやってきて、自分の名前を慣れない手つきで黒板に書いて、よろしくと言う。

そう思っていた。

だがいつまで経っても開いた扉からは誰も現れない。

何事が起きたのかと小さくざわつき始めた教室。

先生も額に手を当てて困った顔をしながら開きっぱなしのドアの向こうを見ている。

そしてたっぷりと時間をかけてから、ついに銀色の髪の頭だけがドアからにょきっと生えた。

やっぱり咲耶だ。

長い銀髪を垂らしながら、ゆっくりと首だけ出して教室の中を窺(うかが)う。

咲耶は今にも泣き出しそうな顔をしていた。

そして教室の後ろにいる俺の顔を確認すると、なんとも魔王らしからぬ情けない声を出して言うのである。

「し、しんやぁぁ〜〜。ひっく、ひっく。しんやぁぁ〜〜」

言い終わるとドアの向こうに引っ込んでしまった。

その様子を目撃したクラスメイト達は言葉を失ってしまう。

唐突に後ろのドアが開けられ、そこから咲耶が制服の袖で顔を隠しながら俺に向かって走ってきた。

俺の胸の中に顔をうずめて小さくなる。

そこまではいいのだが、俺の制服で顔から出てる液体を拭くのはやめてほしい。

「そんなわけで見ての通り、玖珂君は少しばかり人見知りのようでな」

そういえば咲耶は人通りが多くなってからやけに大人しくなっていたな。学園に来る頃には存在自体が希薄だった気もする。

思い出してみれば、最初に出会った時も、秦宮先生に呼び出された時も……。

――思い出した。咲耶は内気な性格だったはずだ。

昨日はずっと美弥と三人で一緒に居たから忘れてしまっていたが、咲耶はいじめられて？　内気な性格になったのだった。

でもまさかここまで残念なことになってしまうとは……。

そんな咲耶の頭を撫でてあやしてやってるうちに、ふと気づいた。

クラスメイト全員が突き刺さるような視線をこちらに向けている。

――やめて、痛い、痛い。

視線だけで人をここまで攻撃できるのかっ。

客観的に見みれば、今朝一緒に登校してきた銀髪美少女転校生を抱きながら頭を撫でているのだ。気にならない方がどうかしてる。

そのとき俺は気づけなかった。

冷たい目線のクラスメイト達が、本当に言いたかったことを。

やがて静まり返る教室の中においてクラスメイトの一人が無情にも、

だが的確な表現で俺たちを描写した。

本人は小さく呟いただけだったのだろうが、静まり返った教室において全員の耳に届くには十分な大きさだった。

「――ロリコン」

ただ冷たかっただけの空気が一変して、氷雪を伴ったブリザードとなり俺に襲い掛かる。

違う！　断じて違う！　俺はそんなんじゃないんだ。信じてくれ……。

小さい子と抱き合ってる俺を、委員長のしおりは面白そうにしながら見ていた。

信じていたのに。（前書き）

常に味方とは限らない

信じていたのに。

「この様子じゃ玖珂の面倒は東條に任せるとしよう。瀬川、席移動してもらってもいいか？」

「も、もちろんですよ」

隣の席の彼女がうなずく。

ありがとう瀬川さん。ほら、咲耶もお礼を言いなさい」

「う、うん。あ、あり、ありが……とぉ」

「ごめんね瀬川さん。咲耶はちょっと内気な性格で――」

「ううん、いいの、ぜんぜん気にしてないよ、じゃ」

早口で言う彼女。

優しい子だ。

そう思った彼女の去り際の、あの……、汚い物を見るような目は、俺の人生の一ページにしっかりと刻み込まれた。

「これで話は終わりだ。お前ら、あまり玖珂をいじめるなよ」

ＨＲが終わってからの咲耶は大人気だった。

咲耶のまわりには人が押し寄せ、矢継ぎ早に質問を浴びせる。

俺たちの間には見えない境界線がある。そこからは誰もはみ出さない徹底振りだった。

人だかりからは、「大丈夫？」とか「何かされたりしてない？」とか、咲耶はすごく心配されていた。

ロリコンという言葉が頻繁に飛び交い、虐待とか、犯罪って単語も聞こえてくる。

そ、そんなんじゃ、ないのに……。

彼らが本気で言ってるわけではないと信じたい。

そんな騒動の中心に居る咲耶。

隣の俺が見えなくなる程にクラスメイトに囲まれているので、助けを求めることが出来ない。

背筋を伸ばしたまま固り、ときおり何かを喋りたそうにしては、また下を向いてしまう。

一言も発せずに居たので、俺への疑惑はさらに深まるばかりだ。

そんな感じで一限の授業開始まで過ごした。

かくして、俺の一年間のあだ名は決まった。

――「ロリコン」だ。

耳を澄ませば聞こえてくる事はあるかもしれないが、面と向かって言うやつは居ないだろう。

俺が居ない間に、「あのロリコンは、あのロリコンが」と、言われ続けるのだ。

ちょっと変なあだ名が付くだけならいいさ。

昨日まで親しく話し合っていた吉川君に前原君。クラスの中でも可愛い笹本さんとも仲良くなることが出来て、「よっしゃ！」って思ってたのに……。

その誰も目線すら合わせてくれない。

去年同じクラスで一緒につるんでた恭介まで態度がよそよそしい。

さすがの俺も、これには心の中で泣いてしまった。

クラスメイトの誤解は徐々に解いていくしかあるまい。

そしてもうひとつ気になる事が。

咲耶の正体を知っていた彼女だ。

だがその疑問は、さっそく一限目の授業で明らかとなった。

数学の教師が彼女を指名したのだ。

「じゃこの問題を……。秦宮、やってみろ」

「はい」

そう短く答えた彼女。

俺の周りの人垣を崩した時とは別に、すこし控え目な印象だった。

長い髪をなびかせながら、黒板に出て問題を解いてゆく。

どうやら天は二物を与えたらしい。

先ほど例題をやっただけの応用問題を簡単に解いてしまった。

――秦宮詩織（はたみやしおり）。それが彼女の名前だった。

魔王とは何なのかを教えてくれた秦宮真理子先生と同じ苗字だ。

真理子先生は学年副主任で担任は持っておらず、俺のクラスの英語の授業を受け持っている。

しかも学園で最も人気のある（男子限定）、大人の魅力あふれるセクシーな先生だ。

先生と同じ苗字なら姉妹か、あるいはお子さんか。

あんな若さと美貌で俺と同じ年齢のお子さんが居るとは信じられない。

だが俺の隣には、先ほどのＨＲ後の尋問からずっと固まっている魔（くや）

王がいる。

ありえないことなど、何ひとつとしてない。

もしかしたら秦宮先生自身が魔物って可能性も……。

美しいという点においてなら、ありえなくも無い話だ。

でもさすがにそれは考えすぎたろう。

仮にそうだとしたならば、秦宮詩織も魔物ということになるではないか。

昨日の口ぶりからするに、先生は人間であると思う。

その推測は後に正しいと知ることになるのだが、それは別の話だ。

昼休みに携帯で呼び出されていた俺は、桜の大樹のさらに奥、普段は人が来ないところで美弥と落ち合った。

四限が終わると同時に、放心する咲耶の腕をここまで引っ張ってきた。

途中からは半分抱きかかえるような形になっていたと思う。

「兄さんが『二股している』とか、『幼女を家で飼ってる』とか、『美女をはべらせてる』とか。すごい尾ひれがついている噂が、一年生の教室まで来ていましたよ。おそらくこの分だと学校中に……」

ある程度は仕方ないと思っていたが、あまりにもひどい。

「美弥はお兄ちゃんのこと、信じてるよな？」

「はい、もちろんです」

いつもの笑顔で答えてくれた。

目もちゃんと笑っている。

昨日の夜のことは美弥の中では無かったことにしてもらえたらしい。

「ちゃんと説明してくれた？」

「それは……、わたしも新しい学校で大事な時期ですので、それで、あの、その……」

「……」

良く出来た妹は肩に下げていた鞄より、袋を3つ取り出した。

「さぁ咲耶さん、お腹がすいているでしょう？　お弁当を作ってきましたので、みんなでいただきましょうか」

勇者として！（前書き）

妹の事となると人が変わるらしい

勇者として！

美弥が作ってくれたお弁当はおいしい。

でも咲耶はそれどころではないらしい。

俺たちと三人きりでも、あの弾けるような元気な姿を見せてはくれなかった。

美弥は「あ～～ん」して咲耶に食べさせてはいたが、昨晩のように嬉々として飛びついては来なかった。

口に運ばれてきた物を機械的に喉の奥へ。

もぐもぐ……。もぐもぐ……。

「も、もう。帰り、たいのじゃ……。学園とは、かくも恐ろしい所なのじゃ……」

「転校初日ですからね。仕方ないのかもしれません」

「そうだなぁ。今日、明日の辛抱さ。そのうち落ち着いてくるから」

「……」

そんな俺の意見にしゅんとしてしまう。

可愛い転校生を見て興奮するのは判るが、元気の無い咲耶の気持ちにも気づいてあげてほしかった。

後、よかったら俺の性癖とかもついでに……。

「咲耶さん、もうお弁当はよいのですか？」

「今は食事が喉を通らぬのじゃ。こんなに旨い弁当を……。すまんの、美弥」

手で硬く握り締められていたスカートの裾（すそ）。

その場所には下ろしたての制服であるにも関わらず、くっきりとした皺が作られていた。

なんだか少しかわいそうになってきた。

「兄さん。ここは兄さんの出番じゃないでしょうか。期待していますよ」

そう妹に言われるまでも無く、どうにかしなくてはいけないか……。

人が少なくなるように時間ぎりぎりまで桜の広場の奥にいた。

咲耶の手を引いて教室へと帰る。終始黙り込んで俯（うつむ）いたままだ。

幼女を拉致して時間一杯連れまわしてから教室へ戻った俺を、クラスメイトは怪訝な表情でもって出迎える。

――うっ……。

一瞬だがたじろいでしまう。

右手の中の小さな手が、強く握られたのを感じられた。

俺は先ほどの決意を新たにする。

俺は教室に凄みを利かせてから切り出した。

「みんな、聞いてくれ！」

教室中の関心がこちらに集まっていた。

「転校生である咲耶と仲良くしてくれることは、素直に嬉しいと思う。だけど咲耶は人付き合いがあまり得意ではないんだ。だから、咲耶がこの学園に慣れるまでそってしておいてもらえないだろうか。たのむっ！」

俺は気づいたら頭を下げていた。右手から伝わってくる熱い感触。

不器用だったかもしれないが、今の気持ちを正直にぶつけたつもりだった。

突然の事態に静まり返る教室。

そんな困惑気味の教室において、一人が生徒の群れ中から俺たちの前に出てきた。

委員長である秦宮詩織がまたもや助けになってくれたのだ。

「確かに私達も玖珂さんのことを考えずに詰め寄ったりして困らせてしまっていたわ。その点においては悪かったかもしれない。」

クラスメイトを説き伏せるように話しを続ける。

「そこで、こういうのはどうでしょう。玖珂さん、実はまだ自己紹介を済ませてはいないの。下の名前を知らない子も多いわ。幸い授業前で全員居るみたいだし……、この場で自己紹介をしていただいて、私達からの質問はいったんお終い。ということでどうでしょうか」

重い空気の中、この提案に異を唱える者は居なかった。

咲耶は俺の手から離れて、自ら一歩、前に進み出た。

「天のしら……。……く、くが。くがさくや。く、玖珂咲耶、で、です……」

下を向きながらだったが、教室全体に十分聞こえる声で咲耶が自己紹介した。

「咲耶、もうひとつ言うことがあるだろ」

そんな俺の言葉に振り返りはせず、やけくそ気味に言った。というか怒鳴った。

「よ、よろしくおねがいします！」

元から下げていた頭をさらに下げて声を張り上げたのだった。
突然の大声に度肝を抜かれるクラスメイト達。

――パチパチパチ。

秦宮詩織が咲耶の不恰好な自己紹介に対して拍手を送る。
それに続くようにして教室中からも盛大な拍手が沸き起こった。
自己紹介を終えた咲耶は俺の背中に隠れてしまう。
その刹那に見えた彼女の顔は、決して悲しい表情ではなかった。
こうして咲耶は正式にこのクラスの一員として認められたのだった。

つかの間の平和が訪れた。
彼女には後でお礼を言わなくてはいけないだろう。
正直いって頭を下げた時の、あの微妙な空気は、俺一人ではどうすることも出来なかったはずだ。
極一部では、事実が露呈しないように牽制(けんせい)してきたとか、転校生を独り占めだとか、そういう意見もあるようだ。
だが全体的にみれば俺の評価もわずかながらよい方向に傾いた……、

気もする。

放課後。誰も居なくなった俺の教室に美弥がやって来た。

「みぃーやーっ！」

ちょっとだけ明るさを取り戻した咲耶が美弥に飛びついて出迎えた。

「よい子にしていましたか？　咲耶さん」

「うむ、わらわはいつでもよい子なのじゃ」

抱きかかえたままその場でくるくると回転している。

やはり咲耶には笑顔が似合っていた。

「それにしても兄さん、あの後に何を言ったのですか？　あれだけあった噂が、どうやら――」

「――やめてくれよ。怖くて聞きたくない……」

「うふふ。恥ずかしがっちゃって……。やっぱり、兄さんは私の兄さんですね」

「うむ。あのときの信弥はかっこよかったのだ。わらわのために――」

「あーーあーーあーー！」

そういうのは柄じゃないのであまり持てはやさないでほしい。
逃げるようにして窓の外に目をやった。
最後の授業がおわってから結構な時間が経ったが、いまだ下校する生徒達がちらほら見受けられる。
「まだ下校する方がいらっしゃいますね」
「咲耶が慣れるまでは人が少なくなってから帰った方がいいからな。だけど今は部活の部員獲得競争が激化してるから、しばらくはこんな感じなんじゃないかな」
「そうですね。ここへ来る際に、私もたくさんの部活から勧誘されてしまい大変でした」
「どんな所から勧誘されたんだ？」
「メジャーな部活はだいたい。どうやらどの運動部もマネージャーさんが足りないみたいでした。頭まで下げられてお願いされたときはどうしようかと困ってしまいました」
「『まねーじゃー』とはどういうものなのだ？」
それは妹がそんじょそこらの娘子とは一線を画(かく)す存在だからですよ。マネージャーが足りないなどと見え透いた嘘で妹とお近づきになりたいのだ。
よく出来た妹をどこの馬の骨ともわからない奴になど渡せるか！

これからは兄として、しっかりと注意して妹の事を見ておかねば。

「部活といえば、兄さん」

「なんだい妹よ。お兄ちゃんに何か用かな？」

どこぞのミュージカルばりに訴えかけるように腕を前へと広げ、まゆ毛をキリッとさせて我が妹に問いかけた。

急に変な態度になった兄を苦笑いでごまかす美弥。

そんな彼女はここに、世界征服の狼煙（のろし）を上げた。

「ボランティア部、行ってみませんか？」

ボランティア部（前書き）

体と心には、傷が残らないようにしたから

ボランティア部

うちの魔王は妹によるトラウマもあってか、ボランティアに何か変な幻想を抱かされていたらしく、どうあっても行きたいらしい。

「わらわはぼらんてぃあしたいのだ！　世界をせーふくするのだ！」

そう言ってきかない。

帰宅部だった俺が急に部活か。

でも美弥が咲耶に付いていくというならば、俺も付いていかねばなるまいな。

兄として。いや、勇者として！

咲耶の手を引いて、美弥の先導でボランティア部を目指す。さすが出来のいい妹は準備も万全だ。

昇降口で靴を履きかえ、上履きを抱えて外に出る。

正面玄関よりグランドに沿って桜の広場と逆の方向へと進み、校舎の陰に隠れるようにして建っている我が学園の特色のひとつでもある部室棟を見つけた。

主に文科系の部室が入っているこの建物は何年か前に新しくなったらしい。

広くゆったりとした部屋には教室にも付けられてないエアコンまで完備してある。

部活をやっている者にとっては、狭い教室というコロシアムに押し込められて睡魔や抜き打ちテストで攻撃してくるクリーチャーならぬティーチャーとの戦いに勝ち続け、死の間際に放つ期末テストという名のメガ〇テに生き残った勇者だけがたどり着ける楽園なのである。

当然ＨＰが赤くなってしまった勇者は部活なんてやらせてもらえるわけが無く、放課後にティーチャーの攻撃に耐え続ける日々が待っているのだった。

下駄箱がたくさん並んでいる正面玄関から入った。

靴を変えてから、こぎれいな廊下を進む。

立派なプレートが吊り下げられている部室を次々と横切り、蛇口が五つ並んでいるピカピカな水のみ場を過ぎて、明るく清潔感あふれるトイレを越えて。

どんどん進んで、建物の一番奥にある非常口へとやってきた。

〈ギュギッ！〉

金属がこすれる嫌な音を響かせた錆びたステンレス製の扉をこじ開ける。

出た先には、赤や緑や黒の、色の分だけ年代を重ねたトタン屋根がある渡り廊下があった。

だんだんと雲行きが怪しくなって来たな。

「まさか……、この半分朽ちたようなスノコの先に続いているプレハブ小屋が目的地なのか？」

「はい。今日行われた部活のオリエンテーションンの資料にはそうあります」

「秘境の湧き湯へ行く時の感じに似ておるのぉ」

ちょっとだけ咲耶が怖がってる気がする。

黒ずんだ鉄骨と痛んだクリーム色の壁をしたプレハブ小屋が並ぶ深部。あんまり日のあたりがいいとはいえないその一角。電気はかろうじて通っているらしい。

「どうやらここみたいですね」

手書きで「ぼらんてぃあぶ♪」と書かれたプラスチックの白いプレートがぶら下げてある。強い風が吹いたら飛ばされそうな感じだ。

世の為人の為になることをする前に、まず先にこの部室をどうにかしたほうがいいと思うぞ。

意を決して、この秘境の隠れ家の戸口を叩く。

ノックをこんこん。

すると、中から「どうぞ」と一声。

〈っギュ！〉

これまた嫌な音を出すドアを開けて中へとお邪魔する。

鬼が出るか蛇が出るか……。

――どうやら、そのどちらも間違っていたらしい。

ボランティア部の部室には……、牛さんがいた。

白く清純なブラウスに秘められた柔らかな巨峰。

纏(まと)うブレザーの胸元の逆三角形から圧倒的な自己主張を行っている。

ワガママなボディーとは対照的に、知的なお姉さんといった印象。

肩まである髪を簡単にまとめたポニーテール。

後ろに持っていけなかった髪を顔の横からそのまま下へ垂らしている。

凛々しいお顔にはフチ無しのお洒落なメガネ。

左手には読みかけの本を掲げている。

「ようこそ」

無表情で迎えられてしまった。

「私は二年二、組橘遥香（たちばなはるか）。よろしく。……入部希望？」

「ああ。俺は同じ二年の東條信弥。こっちは妹で一年の美弥。そしてこの後ろに隠れてるのが、今日転校してきた玖珂咲耶（くがさくや）。よろしくたのむ、橘さん」

「お久しぶりです橘先輩」

「二人とも、遥香と呼んでくれてかまわない」

なぜだか知り合いの二人。よく出来た妹は交友関係のも広いのかもしれない。

冷やかしではないと知ると、手に持った本を置いて話を続ける。

「じゃ遥香。君がこの部の部長なのか？」

「うん、私がボランティア部の部長。君が今学校で噂のロリ――。……いいえ、なんでもない」

何て言われようとしたのか凄く気になる。

「わざわざこんなメンドクサイ部活に入るなんて、Mなの？」

「エッ？」

「……冗談。歓迎するヨ。まさか本当に希望者が来るなんて。捨てないでおいて正解だった」

包み隠さずストレートな意見をおっしゃる方なのかもしれない。

教室にあるものと同じタイプではあるが、多少歪んでいる机に身を屈めてごそごそと中を漁り出した。

目的の物を見つけ、やっとといった感じで体を起こした彼女。その躍動感溢れる胸部からは女体の神秘を感じ取った。

「これ、入部希望書」

ずいぶんと黄ばんだ紙を三枚差し出される。

「ここは去年までは部だったの。といっても、卒業した先輩方が横にある部室棟の部屋を使いたいがために作ったような部活らしかったけど」

それであのプレートか……。

「その部活を私がもらったまではよかったのだけど、部屋が足りという理由であっちを追い出されてしまった」

「そうだったのか。ちなみに顧問の先生とかは居るのか？」

「秦宮真理子先生。二年の英語は全クラス担当してると思う」

今まで黙っていた咲耶が突然割って入って遥香に声を掛けた。

「おぬしも勇者なのか？」

「そういうあなたは魔王」

一瞬、鋭い視線が交錯する。

咲耶は言うだけ言って、いつもの調子で俺の制服をぐいぐいやり始めた。

秦宮詩織といい橘遥香といい、情報化社会の現代において魔物は結構ポピュラーな存在だったりするのか。

「なぜ咲耶の正体を知ってるんだ？　そもそもこの部活は何をするところなんだ」

「あなた達になら、言ってもいいかな」

相も変わらず抑揚の無い声で続けた。

「学園内外のゴミ拾いや行事に駆り出されたり。地域のお祭りのお手伝いとかの奉仕活動。いわゆるタダ働き。魔物退治なんかもたまに」

「へぇー。結構まともな活動をやってるんだな。……ん？　最後に妙な言葉を聞いたような」

「タダ働き？　やっぱり労働の対価って必要だと私も思っ――」

「いや、そっちじゃなくて」

「奉仕活動なんてものは自己満足型の方々にやらせておけばいいと思う。新しい部活発足の審査は結構厳しいらしくて、この部を乗っ取ったんだけど。もう少し考えればよかった」

「いや、ちがくて。てかサラリと怖いこと言わないで……」

「確かにちょっと強引だったかもしれないけど、実際の活動が伴わないような部を陥(おとしい)れるのに、何のためらいも無かったわ」

「も、もうそれ以上聞きたくない……」

「じゃあ、魔物退治？」

首をこくこく上下に動かす。

「知性も持たないようなのが常世(とこよ)から迷い込んでくることがある。それを退治する、というかそれが主な仕事、……になってほしい。意志がある魔物のほとんどは友好的だし、話したらちゃんと判ってくれる」

非常に衝撃的なことを聞かされてしまた。退治と聞いて思わず尻込みしてしまう。

「どうする？　やっぱり入部、やめる？」

なんとなく危険な香りが漂い始めた空気の中、恐れを知らぬ我らが魔王は、

「もちろん、ぼらんてぃあするのじゃ」

そう声高らかに宣言するのであった。

「私はこれ、秦宮先生に出していくから今日は帰ってもいいよ」

上手く書こうとして逆に不揃いになってしまったものと、丸みを帯びながらもバランスよく丁寧に書かれているものと、ミミズがのた打ち回ったようなもの。

三枚の入部希望書をひらひらさせて言った。

「あとこれ。私の連絡先だから」

そういい残して、校舎へと消えていった。

手渡された小さな紙片。０９０から始まる番号とメールアドレスだった。

遥香の後姿が見えなくなるまで見届けた俺達も家路へと向かう。

「咲耶さん、学園は楽しかったですか？」

「うむ、たまにならこういうのも悪くないの」

「何言ってるんだ。明日から毎日行くんだぞ？」

「な、なぬ……？」

目が点になってしまった咲耶だが、

「し、信弥と美弥が一緒ならば、考えてやらんこともない、かのぉ？」

秦宮姉妹の姉（前書き）

先生が優しく教えて、あ・げ・る♪

秦宮姉妹の姉

昨日に引き続き今日も、嫌がる魔王を連れて学園へと向かう。

巫女服の時よりは目立ってはいないが相変わらずの有名人っぷりで、カチコチな咲耶の手を引いている俺への注目もひとしおだ。

朝の教室においては質問攻めにされることは無かった。

昨日の一件でみんな理解してくれたらしい。

たまに女子が隣に居る俺をガン無視して咲耶に一言挨拶をしてくれる。

テレながら上目使いで小さく「……おはよぅ」と言う咲耶に彼女達はメロメロだ。

しかしながら、廊下からこちらを覗く顔が多いこと多いこと。

咲耶目当てなのだろうが、人が集まって異様な雰囲気だ。

そんな彼らもチャイムが鳴ると同時に自分達の教室へ帰っていく。

「今朝は先生がいらっしゃいません。なので、出席だけ私が取ります。連絡事項は昨日言われた通りで変更はありません。忘れないでください」

クラス委員長である秦宮詩織（はたみやしおり）が先生の変わりに出席を取っていく。

早速、『委員長』という呪(カース)いが彼女を縛り付けている。

だが秦宮詩織の人望もたいしたもので、一日ですっかりクラスの中心人物となっていた彼女によってスムーズに出席が取られていく。

根は真面目なのか、与えられた仕事をしっかりとこなしている。また、楽しんで仕事してるようなので仕切り屋タイプなのかもしれない。

そして四限の英語の時間がやってきた。

〈――コツッ、コツッ、コツッ――〉

誰も居ない廊下からヒールが響く音が近づき、この教室の前で止まった。

開け放ったドアを後ろ手で閉めて、堂々とした面持ちで前へ。

純白のYシャツに漆黒のベスト、真紅のタイトミニから生足を晒(さら)して、その淫魔はやってきた。

持っていた教材を教卓の上にバサリと放り投げる。

背を向けて、チョークを拾い上げ、黒板に押し当てた。

〈カッ！〉

筆記体で滑らかな文字を綴(つづ)り終えると、持ったチョークを打ち捨て

る。

こちらに向きなおり、空いた手をわざわざ胸の下で組んで絶景の双丘を見せ付けてきた。

教壇の一段高い所から品定めするかのように鋭い視線で全体を見渡してから、

「知っている生徒も多いと思うが……。二年学年副主任で、この学年の英語を担当している秦宮真理子だ。お前達、あんまり面倒事は起こすんじゃないよ。ちなみに、質問は受け付けない。じゃ授業を始めるからね」

横暴な自己紹介だった。

男子生徒は肉体も精神も唯我独尊な彼女に惚けたように一挙手一投足を観察している。

女子生徒はデキる大人の女性に憧れの眼差しを向けている。

教科書を読みながら、今夜の獲物を物色するかのように教室を徘徊する淫魔。

いや、違った。

教科書を読みながら、次に指名する生徒を選ぶように教室を歩き回る先生。

スラリと引き締まった生足を交互に動かし、机の間を行ったり来たり。

近寄ってきた先生に思わず目が行ってしまう。

服の上からでもハッキリと想像できる括(くび)れた腰と天に向かって突き出された胸のラインは、オトコならば誰でも誘惑されてしまい、否が応でもその存在を強く意識してしまう。

俺達を魅了してやまない彼女の通り過ぎた道には、本能を惑わせるエレガントなオトナの香りに誘われた男子の視線がその後を追うかのように泳いでいた。

フェロモンを撒き散らしてリビドーあふれる年頃の男子生徒を誘惑しているようだ。

こ、この先生は学園に男でも漁りに来ているのだろうか……。

こうまでされたら秦宮真理子先生が実は魔物だという可能性も再検討しなくていけないだろう。

秦宮詩織は何か我慢できない感じで頭を抱えている。

やはり二人は何かしら関係があるようだ。

「Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　Ｍｓ　Ｋｕｇａ．　Ｒｅｐｅａｒｔ　ａｆｔｅｒ　ｍｅ．」

なんてことだ。俺が誘惑されていた間に咲耶が指名されてしまった。

そんな俺の不安をよそに、おどおどした様子で立ち上がった彼女は教科書を掲げて読み始めた。

「……い、Ｉｔ ｉｓ ｎｏｒｍａｌ ｔｏ ｍａｋｅ ｅｒｒｏｒｓ ｉｎ ｓｐｅａｋｉｎｇ ａ ｆｏｒｅｉｇｎ ｌａｎｇｕａｇｅ， ｏｎｅ ｌｅａｒｎｓ ｔｏ ｓｐｅａｋ ｂｅｔｔｅｒ ｂｙ ｈａｖｉｎｇ ｏｎｅ' ｓ ｍｉｓｔａｋｅｓ ｐｏｉｎｔｅｄ ｏｕｔ ａｎｄ ｃｏｒｒｅｃｔｅｄ．」

淀みなく読まれた完璧な発音に教室中の視線が咲耶に集中する。

さすがの事態にこの俺も、通り過ぎた生足ではなく隣の魔王（さくや）を見てしまった。

そんな視線を受けてか、咲耶は椅子の上で小さく縮こまり、立てた教科書を盾にしながら机に伏せて顔を隠している。

「Ｔｈａｔ' ｓ Ｅｘｃｅｌｌｅｎｔ！！ あんた達も私の足ばかり見てないで、Ｍｓ Ｋｕｇａを見習って教科書をしっかり見てなさい」

先生の言葉はごもっともな意見ではあるが、これみよがしに生足を目の前で動かす先生も悪い。

というより、咲耶が英語がぺらぺらだとは思わなかった。

誘蛾灯のような先生は、再度教室を練り歩き英文を流暢（りゅうちょう）に読み始める。

当てられた生徒はなぜだか話を聞いていない者が多く、そのたびに同じ質問を先生にさせていた。

呆れたように髪をかきあげる先生。

強調されるムネとワキの造形美。

高く掲げられた細い腕から流れる形が、重力と理性に反逆する胸部を際立たせる。

振り下ろされた腕から伝わる振動に震える母性と劣情。

……これ以上ガン見するとあらぬ誤解を受けそうなのでこの辺にしておこう。

とまぁ、こんな感じで授業は進んでいった。

〈キーン、コーン、カーン、コーン！〉

「おっと、今日の授業はこれで終わりだね。昼休みになるけど、次の時間のことも考えてあまりハメを外しすぎるんじゃないよ」

そう釘を刺して、淫魔は自らの巣に帰っていった。

英語が毎回こんな調子だといろいろと我慢出来なくなってしまうんじゃないだろうか。

もんもんとした気持ちを抱えたまま昼食の時間になる。

美弥が昨日と同じ場所で待ってくれているはずだ。

昨日連絡した橘遥香（たちばなはるか）も来るらしい。

「ねぇロリコン。話があるから、ちょっと来なさいよ」

さっきまで居心地悪そうにしていた秦宮詩織がいつのまにか目の前まで来ていて、座っている俺を見下ろしながら言った。

まさかこんなに早く面と向かって言われることになるとはな。

教室はその「ロリコン」という言葉に静まり返り、俺達の行く末を見守っている。

彼女にはお礼を言わないとないと思っていたが、やっぱり止めとこうかな……。

秦宮姉妹の妹（前書き）

もぉ～、恥ずかしいからヤメテよ。お姉ちゃん！

秦宮姉妹の妹

「ねぇロリコン。話があるから、ちょっと来なさいよ」

そう上から物申すのは、委員長である秦宮詩織(はたみやしおり)だ。

クラスメイト達はまさかの凸撃に対して、遠巻きにこちらを伺っている。

「まさかとは思うが、ロリコンとは俺のことかな？」

「そうよ。いま学園で一番有名なロリコンといえば、アナタのことよ」

これ以上は傷口に塩を塗るだけなので大人しく従おう。

それに彼女とは、昨日の魔王発言からまだ話せずにいたのでいい機会だと思う。

だがこれから美弥たちとの昼食の約束もある。

「昼休みは咲耶と一緒に先約が入ってるんだ。先に咲耶だけでも送ってもいいかな」

「かまわないわ。私も東條君と二人だけでお話しがしたいの」

ということで、美弥に短く用件だけ入れたメールを送り、迎えに来てもらうことに。

不安がる咲耶の手を引いて昇降口まで連れて行く。

その後ろからは詩織がぴったりと付いてきている。

これから島流しにされるかのような咲耶は、俺の顔を見たり下を向いたりもじもじとしている。

ずいぶんと可愛い仕草だが、ここは心を鬼にしなければいけない。

「ここに居れば美弥がすぐに来てくれるから」

「信弥が、我を置いて、どこかへ行ってしまうのだ……。こ、これからは、もっとよい子にしておるから、わ、わらわを捨てないで、ほしいのじゃ……」

「そんなに大袈裟なことじゃないから……。だれも取って食いはしないよ」

頭を撫でてやってから、咲耶を残しその場を後にする。

隅っこで丸くなり、こちらが見えなくなるまでちらちらと見ている魔王（さくや）をあのままにしておくのは忍びなかったが、よく出来た妹がすぐに見つけてくれるはずだ。

黙って詩織の後ろを付いていく。

二年生エリアである三階のさらに上。

普段使われない屋上へと続く薄暗い階段へやってきた。
咲耶は無事に保護されたらしい。
この学園にも一応屋上がある。
ちゃんとフェンスで囲まれてはいるが、当然一般生徒は立ち入り禁止である。
そんな屋上の鍵をどこからともなく取り出した秦宮詩織。
鍵を鍵穴にあてがってから、どこか釈然としない態度で言う。
「ちょっと、何で私がこんな物持ってるのか気にならないの？」
「え？　それはまぁ気になるけど……」
「そうでしょう？　人に吹聴してまわるような話でもないから念のためにね。こういう機会でもないとなかなか来れないのよね」
得意げな感じなのはいいが、鍵を差し込もうと暗がりの中で悪戦苦闘している。
〈カチャリ〉
鍵が開く音が鳴った。ドアノブを握ったまま振り返り、
「屋上から見る桜もいいものよ」
そう言って開け放たれたドア。

暗い廊下をうららかな日差しが照らし、誇りっぽい空気を吹き飛ばすように涼しい春の匂いが吹き抜けていった。

四階の高さから見る桜は新鮮で、その大きさを改めて実感した。

パノラマに広がる桜花がカーテンのように樹木を覆い隠しており、舞い上がった花びらが床には散っていた。

「じゃ改めまして、秦宮詩織(はたみやしおり)よ。よろしくね東條君。お姉ちゃんのこともあるし『詩織』、なんなら『委員長』って呼んでくれてかまわないわよ？」

「東條信弥だ。詩織さんって呼ばせてもらうよ。こちらこそよろしく、詩織さん。やっぱり秦宮先生とは姉妹だったのか」

「こんなに引っ張るつもりはなかったんだけど。あなたがたが面白くって、ついね」

そう言ってウインクしながら舌を出しておどけてみせる彼女。絵になる光景だった。

「だから魔物のことについては一通りは理解してるわ。あの魔王(さくや)ちゃんのことで困ったことがあったら私に相談してちょうだい。女同士だし、力になれることもあると思う」

「ありがとう。そのときは相談させてもらうよ」

咲耶の味方が増えるのは心強かった。

「それにしてもさっきのロリコンは言いすぎじゃないか？　俺のガラスのハートが音を立てて砕け散ったぞ」

「あんた、お姉ちゃんをいやらしいし目で見てたでしょ。そのお返しよ」

ガン見してたのをしっかりと目撃されていたらしい。

「見てたのは俺だけじゃないだろ？」

「やっぱり見てたんじゃない……」

確かにあの光景は目に焼き付けたのでいつでも思い出せる。

そう、あの大きなムネとすべすべの足――。

〈ドカッ〉

スネに蹴りが飛んできた。

「な、なにすんだよ。いきなり」

「東條君、今いやらしいこと考えてたでしょ」

「……」

手ごわい相手のようだ。

仕切り直すように咳払いを一つして、

「それにしても秦宮先生は魔物の類か何かなのか？　俺の予想ではサキュバスだと」

「はぁ？　今の台詞お姉ちゃんが聞いたらマジでどうなるかわからないわよ」

青い顔をして引いたように言う。立場的にも姉がかなり強いらしい。

もしかすると俺は大変なことを言ってしまっているのかもしれないな。

「ん？　ちょ、東條君。その理屈から言うと、妹の私も魔物だと思っているの？」

「そこまでは言ってないよ」

「東條君が思わなくても、そう言われているのと同じなのよ。いい？　私達はれっきとした人間よ。私はあなたと同い年で、お姉ちゃんとは少し年が離れてるだけよ」

魔物扱いされて怒っているのだろうか。少し強い口調で言われてしまう。

「わかったよ。……それにしても今日の秦宮先生は刺激的だったな。普段からあんな感じなのか？」

姉の話になると急にしおらしくなって話し始める。

「私って今日初めてお姉ちゃんの授業受けたのね。それでお姉ちゃ

んが私のことをからかうためにあんな派手な格好してたんだと思う。いつもはもう少しだけ大人しい服装なんだけど……、私服はあんな感じね。今朝やけにニヤニヤしてると思ってたらああいうことだったみたい。恥ずかしいったらないわ」

楽しそうな姉妹の仲らしい。

「内緒だけどね、お姉ちゃん彼氏が出来ないの気にしてるみたい。『私には仕事があるんだー』とか酔った勢いで叫んだりとかしちゃって。妹の贔屓目無しに見ても、お姉ちゃんって若くて、スタイルもよくって、顔だっていいじゃない？　信弥君はどうしてだと思う？」

「んー……。やっぱり高嶺の花って感じがするな。完璧すぎておいそれと手が出せないというか」

素直にそう思う。あの先生に手を出せる自信のある男はそうはおるまい。

「やっぱり男の人ってそう思っちゃうのかしら。教師って忙しいみたいだし、神社のお仕事もあるから出会いも全然ないってぼやいてたわ」

聞いてもいないことをぺらぺらとしゃべりだす詩織。

まさかあの秦宮先生にそんな一面があろうとは思わなかった。

だがこの情報はお墓の中まで持っていかなければならない類の物だと思う。

下手にしゃべるとあの先生に何をされるかわかったものではない。

ヒールで踏まれて、ムチや蝋燭を使って……。

ある意味ご褒美と取れなくもないが、その先にどんなお仕置きが待っているか想像してしまうと、思わず背筋が伸びてお尻がキュンとなってしまう。

「詩織さんは先生と仲がいいんだな」

「な、なんでそうなるわけ。わ、私も将来はお姉ちゃんみたいになりたいから、失敗しないように参考にと思って……。って何言わせてるのよ！」

自爆気味の詩織は怒ったからなのか恥ずかしかったからなのか、赤くなった顔を逸らした。

「そうそう、昨日お姉ちゃんから聞いた。魔王と一緒にボランティア部に入部したそうじゃない」

「咲耶がどうしてもといって聞かなくてな」

「私も紹介してよ。ボランティア部に入ってあげるわ」

「どうしてそうなるんだ？」

「私が入ると五人になるじゃない？」

「橘遥香と、俺と美弥と咲耶と、詩織さんで、５人になるな」

「そうしたら、部として認められて部室棟に移れるかもしれないわよ？」

「そ、それは魅力的だな」

思わず飛びついてしまった。毎日あの嫌な金属音を聞かされると頭がおかしくなりそうだ。

「それに、魔王はちゃんと監視しておかないとね」

「咲耶はそんなに危険だとは思えないが」

「そうかしら。心あたりとかは無いの？」

そう言われてしまうと、あの一件を思い出してしまう。

言葉を詰まらせた俺に詩織が見透かしたように言う。

「そういうわけで、今日の放課後にでもよろしくお願いね」

「しょうがないなぁ」

その答えに満足そうに頷(うなず)いた彼女。

そう約束して俺達は屋上を後にした。

魔王の御業（前書き）

そして、歴史は繰り返す

魔王の御業

教室前で小さく手を振って詩織と別れ、美弥たちが待つ桜の広場の奥へ。

話しこんでしまったので急がなければゆっくり弁当にありつけない

「……あ。待っていましたよ、兄さん。用事はもう済みましたか？」

「いらしゃい」

美弥がにっこりと、遥香が一瞥して迎えてくれた。

レジャーシートの上に行儀よく正座して可愛いお弁当を広げている橘遥香（たちばなはるか）。

その横で足を崩した美弥と、妹に慰められている咲耶。

「おまたせ。咲耶を保護してくれて助かったよ」

「いえいえ、咲耶さんってば可愛いんですから。兄さんに捨てられたって言って、この通り泣いてばかりで」

「玖珂さんって昨日会った印象とずいぶんと違うのね」

美弥にべったりとぐずぐずやっている咲耶。

「しんやぁ～」

今度は隣に座った俺にのしかかってきた。

「わらわは信弥に捨てられてしまったのか？　良い子にしておるから……」

「この魔王はずいぶんとネガティブなのね。……食べちゃいたいくらい」

「――エッ？」

「ん？」

どうしたの？　とでも言いたそうな顔を遥香に返された。

「しんやぁ～！」

「おいで、咲耶。よしよし」

頭を撫でてやると、先ほどの涙が嘘のように笑顔を取り戻していった。

「兄さん、こちらが本日のお弁当です。どうぞ」

残されていた一回り大きな弁当箱を渡されて、早速広げてみた。

「今日もありがとう美弥。いただきます」

冷めても美味しい美弥のお弁当。

一口サイズの色々なおかずが小分けされ入っている。俺には嬉しいミートボールや揚げ物。サラダや温野菜まで入って健康にもばっちりだ。

眺めているだけでは腹は膨れないので、さっそく戴いた。

そしてその後、必然的にこういう流れになる。

「はい、咲耶。あ〜〜ん」

――「あ〜〜んむ」

手を両頬に当てて、緩んだお顔でもぐもぐしてる。

さぁ……。『第一回　チキチキもぐもぐレース』の始まりだ。

「あぁん、兄さんずるいです」

その様子を見た美弥が、すかさず参戦を申し込んできた。

――「あ〜〜むぅ」

箸から獲物をさらっていく小鳥。

俺も負けじと弁当からとっておきの餌（おかず）を差し出す。

「ほら咲耶、こっちも食べるんだ」

――「もぐもぐ……、もぐもぐ……」

あっちへ行ったり、こっちへ来たり。迷走する咲耶。

そろそろ口の中に物が溜まってきた頃だろう。

だんだんと動きが鈍くなり、鼻で息をするようになってきた。

あごを上に向けて、もがもがと何かに抗っている。

そんな慌てふためく咲耶が目を付けたのが、上品に口を動かしながらその様子を傍観していた遥香だ。

「もぐもぐ……、ごくっん。もぐもぐ……。遥香、わらわを、助ける、もぐもぐ、のじゃ」

咲耶が遥香になびいた。

それを必死に引き留めようとする美弥。

「あぁ……、ほ、ほら。咲耶さんの大好きな鳥のから揚げですよ？　はい、あ〜〜ん」

「も、もう、もぐもぐ……。ごっくん。やめるのじゃ。わらわは自らの意思で遥香の軍門に下ったのだ。もうそなたらの「あ〜〜ん」に答えてやりなど、しないのじゃぁぁぁぁ！　……のぉ？　遥香っ」

遥香の後ろに隠れて、背中から覗き込むようにして同意を求めている。

どうやら咲耶は判っていないみたいだ。自分自身がどれだけ愛ら

しいのかを。

そうして、遥香に止めを刺されるのであった。

「玖珂さん。はい、あ〜〜ん」

「――……っ！」

咲耶の脳裏には走馬灯のように、あの悪夢が蘇っているだろう。

文字通り開いた口がふさがらず、咲耶はその場に愕然（がくぜん）と崩れ落ちたのであった。

何が起こったのかと困惑する遥香が、目で俺に説明を求めてきた。

「以前にもこういうことがあってな……。なに、心配いらないさ」

コテンと転がった咲耶の短いスカートからは、純白の何かが「こんにちは」していた。

俺は学習している。

ここでさりげなく、ごくさりげなく取り繕ったとしても、よく出来た妹には何一つとして通じないことを。

なので俺は、泣く泣く顔を横にそむける次第であった。

「はい、兄さんはよく判っています。……咲耶さん、そろそろ起きてください」

レジャーシートをがさがさする音だけが、俺の耳には聞こえている。

「――はっ！　わらわは、先ほどまで、いったい何を……」

「咲耶さんは、私のお弁当のあまりの美味しさに気を失っていたんですよ」

「そ、そうなのか？　たしかに、何かを食べていた記憶が……」

「ほら、咲耶さん。まだお腹が空いているでしょ？　お弁当をいただきましょう」

「ん……、うむぅ……」

どこか納得のいかない咲耶だったが、空腹が彼女を後押ししたようだった。

尻餅をつき、ペタンと座り込んで食べかけのお弁当に箸をつける。

「そういえば、遥香。今日の放課後に入部希望者を連れて来てもいいか？」

「被害者をまた一人増やすのね。いいわよ」

「エッ？」

「それで、その奇特な方って一体誰かしら？」

「あ、あぁ……。俺と一緒のクラスで委員長もやってる秦宮詩織だ。顧問の秦宮先生の妹らしいぞ？」

「そう、判った。今日の放課後に連れてくるのね」

「そういうことで頼む」

あっさりと承諾してくれた。俺としてもあの魔窟から一日でも早く抜け出したいものだ。

「先程の用事とは、その事だったのですか？」

「まぁ、そんなところだ」

「そうだったのですか……。ところで咲耶さん。――ニンジンは、お嫌いですか？」

ビクリッと震え上がった後、空々しい顔で錆びた機械のようにギコギコと首だけを美弥に向けた。

咲耶の小さな弁当箱の隅には、綺麗に寄せられた手付かずのニンジンがある。

美弥は優しく言った。まだ、優しく言っているのだ。今ならまだ間に合うはず。

ここは勇気を振り絞るところなんだぞ、咲耶！

「わ、わらわは、にがいのは、に……、にがて、なのじゃ……」

そ、そうじゃないだろ咲耶！　ここは空気を読まないとダメなところだ。

だが美弥の次の言葉は、俺の予想に反したものだった。

「そうなのですか……、それでは仕方ありませんよね」

えぇええ！？　いいのか？　俺はダメで咲耶はいいのか……。可愛いは正義なのか！？

「じゃ、じゃろぉ？　食べれぬものは……、た、食べれぬのじゃっ！」

「もう、咲耶さんったら」

その言葉に、あの、いつもの微笑を浮かべて、

「――では、『あ～～ん』して食べさせてあげましょう」

顔は菩薩であったが、その心には般若が宿っていた。

「ひえぇぇぇぇぇ！」

軍門に下った記憶が朧（おぼろ）に残っているのだろうか、すかさず遥香のところへ駆け出した。

しかし、よく出来た妹が一度補足した獲物を逃がすわけもなく、

「遥香先輩！　お願いします！」

「わかった」

そう短く答えた遥香。

咲耶の淡い期待を見事に裏切り、遥香は咲耶を羽交い絞めにした。

「ま、待て！　まつのじゃぁぁぁあ！　お、落ち着いて話し合うのじゃ。ほ、ほれ。望みを言うてみよ。わらわが叶えてしんぜようぞ。だ、だから！」

遥香が耳元で怪しく囁く。

「私が欲しいのは、あなたの、――悲鳴」

「ヒィィィィィィッ！」

箸の先に乗る禍々しいオレンジ色の物体が容赦なく近づけられていく。

咲耶は体を必死に後ろに反らせて、唯一動く首をぶんぶん振って拒絶を表していた。

目に涙を一杯に貯めて俺に助けを求めようとするが、どうすることも出来ないので俺もニンジンを箸でつまむ。

「「さぁ、さぁ！」」

「い、嫌なのじゃあぁぁぁぁ嗚呼っ！」

じたばたと遥香の拘束を抜け出した咲耶は、

「み、みんな、居なくなってしまえばいいのじゃぁぁあああー」

「あぁ、咲耶さん！」

「ふぇぇえん、わあああぁぁぁん」

泣きながら逃げだした……。

ちょっと悪ふざけが過ぎてしまったようだな。

校舎の方へと見えなくなる咲耶。

「どれ、仕方ないから俺が迎えに行くよ」

「あ、兄さん。判っていますよね？」

「あぁ、ちゃんとフォローしとくよ。ここは任せた」

そう言い残して、咲耶が走り去った方向へ向かった。

咲耶は本当にしょうがないな。

どんな言葉で慰めるべきか。そんな事を考えながら、獣道にも似た林の中を足元に生い茂る草を払いながら進む。

どうせ桜の大樹がある広場で観衆の目にさらされて固まっている頃だろう。

しかし、何かが変だ……。

いつもは賑やかなあの広場から聞こえる生徒達の声がまったく聞こえてこない。

何か嫌な感じがした俺は、急ぎ咲耶の後を追う。

桜の大樹がある広場へと戻ってきた俺は、その異様な光景を前に、ただ立ち尽くしていた。

――そこには、誰も居ない。

「え？　何故？」

隅っこでいちゃつくカップルも、弁当を広げる生徒の輪も、ボールやラケットを手に元気に動き回る生徒も。

そこには誰一人として居なくなっていた。

ただ、桜の花びらだけが、無人の広場を舞っていた。

出会いの前日―Ｃａｕｔｉｏｎ―

短い春休みがもうすぐ終わります。

私は和室に置かれている大きな箱を開きます。

その中に薄いビニールに包まれて丁寧に梱包されているのは、まだ一度も袖を通したことが無い女子用の制服。

この春、私はかねてより念願だった兄さんと同じ東武学園に合格することが出来ました。

そこには以前に会ったことのある橘先輩も通っているらしいです。

ようやく兄さんと同じ学園へ通う事が出来るようになります。

毎朝違う方向へ登校するこの一年はすっごく長かった気がします。

ああ見えて兄さんは勉強はできるほうで、私も気を抜いてしまっていたら危なかったかもしれません。

勉強は出来ても、少しだらしなくってデリカシーにかけるのが玉に瑕（きず）ですけど。

あと、ちょっとだけエッチです。

兄さんは私が居ないとすぐ不精してしまうので、妹として責任を持って面倒を見てあげなければなりません。

お友達の皆さんは、兄妹の仲がよい方はあまりいらっしゃらない様子です。でもそんなことは関係ありません。

兄さんは、私の兄さんなのですから。

お父さんとお母さんには悪いと思いますが、初めての制服姿は兄さんに見てもらいと前から思っていました。
なので、今日はそのチャンスなのです。
兄さんの靴があるのは既に確認済みです。

どうしましょう。なんだか緊張してきてしまいました……。

そ、そうだ。初めてであるならば、体を綺麗にしたほうが良いのでしょうか。

私は急いで着替えのブラとショーツを取りに部屋へと戻ります。

そこには、つい先週まで使っていた制服があります。
この服を初めて着た時に兄さんは、ぶっきらぼうに「可愛い」と言ってくれました。

もう着ることないのかもしれませんが、なんとなく仕舞えずにいます。
ブラウスだけならば普段着ても問題なさそうな気がします。
でも小さくなってしまった物もあるので、そういうものは扱いに困ってしまいます。

私は衣装棚から下着を選びます。

「これと……、これ。……やっぱりこっち」

なぜでしょう。
新しいショーツを選んでしまいました。
別にみせるわけでもないのに……。
何を考えているのでしょうか、私は。

と、とにかく、最初なのですから体を清めなくてはいけません。
火照った顔を隠すように足早にお風呂場へ向かいます。

（「各隊員戦闘配置に付け。これより作戦行動を開始する！」「さー！　いえす！　さー！」〈ズビシッ！（敬礼）〉）

脱いだセーターをたたんで洗濯籠の中へ。

（「敵軍の第一防衛ライン、突破したであります！」「油断するな。引き続き攻撃の手を緩めず、敵の懐へ突き進むのだ！」）

スカートをパサリと落として、ブラウスのボタンを上から順に外す。

（「おそるるに足らないであります！　まだまだイクでありますよ〜！」）

首筋から露（あらわ）になっていく乙女の園は、肩から流れる細い鎖骨をたどり、女性を象徴する柔らかさに溺れそうな谷へ。

（「気をつけろ！　この＊クレバスに落ちたら生きては戻れないぞ！」「あまりのフカフカした感触に、天国まで落ちてしまいそうであります！」）　＊氷河などに形成された深い割れ目

最後のボタンを外し終えると、細く丸みを帯びた腰とキュートなおへソ。

（「すごいであります！　まるで現代のモーゼのように敵の装甲を分断してイクであります！」）

数々の色を好んだ英雄が彷徨ったとされる二つの丘。その秘密が今解き明かされる！

（「隊長！　上部はすべてご開帳であります！」〈ズビシッ！（敬礼）〉「うむ、よくやった。残すは敵本陣。我らを階段やエスカレーターで幾たびも挑発し、かと思えば風でヒラリと舞うスカートの中から不意に見せるその素顔。その奥には今まで決して手の届かなかったユートピアが在るのだ！　今こそ乙女のすごい秘密を隠す布切れに、目に物見せてくれるのだ！」）

そして、やわらかで、大事なところを。つ、つまりパンツに、い、いま！　手を掛けて……、

「は、恥ずかしいので止めてください！」

（「敵が突如勢いを増して反転。これ以上の追撃は不可能であります！」「ぐぬぬ……。ここまで、なのか……」「敵本体、鉄壁の要（バス）塞（ルーム）に立てこもりました。鍵も掛けられ、もう我々の戦力ではどうすることも出来ないであります」「隊長！　我々はこれから一体どうしたら……」「……お前達、『カミカゼ』という言葉を知っているか？　たとえ無理だと判っていても、男には行かねばならぬ時もあるのだ！」「た、隊長！（涙）　我々もお供するであります！〈ズビシッ！（敬礼）〉「私に続くのだ！　とぉーつげきぃぃぃぃぃ！」）

……。

兄さんの部屋の前までやってきました。
東武学園の新一年生である私が、そこには居ます。
普段はつけないリップまでつけて準備は万全。
うぅ〜、緊張してきました。
〈コンコン〉
「兄さん、少しお時間よろしいでしょうか」
……おかしいです。
いつまで経っても返事がありません。
そおっと扉を開けて中の様子を伺ってみます。
兄の姿は何処にもありません。
トイレでしょうか？　居ませんね。
リビングにもキッチンにも、和室も探しました。
もしかすると、と思って下駄箱をよく見てみます。
どうやら兄さんのサンダルが無いようです。
なんということでしょうか。
よく確認しなかったのが悪いのですが、
これではまるで私がバカみたいです。
一人で浮かれて、勝手に落ち込んで……。

頭が冷えた私は私服に着替えなおします。
よく考えてみると、体を綺麗にする必要など無かったのではないでしょうか。

もう、なんだか切ないです……。兄さん……。

「ただいまー」

今日は意外な大収穫だったぜ。
まさか俺達の同士である恭介のヤツが、みんなに内緒であんなものを一人で楽しんでいたなんて。

あの日誓い合ったではないか。
俺達は決して裏切らない。抜け駆けしない。卒業しない。

言っていて悲しくなってくるが、あの時はそういうノリだったのでしょうがない。

というわけで裏切り者は泣いていたが、掟に従い全員で均等に山分けした。もちろんページ単位で。

見つからないうちにさっさといつもの場所へ隠してしまおう。
もちろんベットの下や辞書のケースの中なってベタな所じゃないぜ。

部屋の中央に一箇所だけ開くようにした天井板の裏。
机の引き出しを引き抜いた奥にある空間。
意外なところではクローゼットの中折れ扉の裏だ。

クローゼットの中に入って扉を閉めないと絶対に判らないこの場所は、機密性と機能性を満たすパーフェクトな、まさに玉座とも言うべき場所だ。
今日のこいつは王位を継承するにふさわしい逸材だろう。
舞い上がる俺が自室の扉を開けたとき、王の墓は暴かれた後だった。
すべてのコレクションが机の上で平積みにされていた。
親は出かけているから美弥の仕業か？
しかもよく見るとお気に入り順になってるんですけど……。
どういうことなのでしょうか。
法会議ものですよ？　軍曹さん！
（「すまない。われわれも応戦を試みたのだが、残存兵力では太刀打ちできなかったのだ。いや、そうでなくても彼女の戦闘能力は異常だ。もしかすると我々は眠れる獅子を起こしてしまったのかもしれない」）
よく出来た妹というのは、兄の性癖鑑定まで出来ちゃうものなのか？
もしかしたら定期的にチェックされていたのかも……。
とりあえず肝心なところで役に立たない軍曹さん達は営倉行きだな。
いつ出すかは未定だ。
めんどくさいので多分もう出てこないだろう。

晩飯は俺だけ焦げた目玉焼きだった。
美弥はいつもどおりに振舞っているように見えるが、あれは怒っている顔だな。
ツンとした表情と艶やかな口元に、少しだけ大人びた印象を受けた。
親父とお袋が「お前、何をやらかしたんだ？」といった顔で俺を見てくる。
どうしてなんだ？
アレが見つかったのが悪かったのか？
使用頻度まで把握しておいて今更怒ってるのか？
謎だ……。

〈ジリリリッ〉

久しぶりの活躍だからだろうか、やかましく鳴る目覚まし時計。
それを達人が放つ無拍子のごとき動きをもって「三鳴り」で上部のスイッチを叩く。
沈黙した朝の守護神。
その鮮やかな動きに自分自身に酔ってしまいそうだ。
毎朝鍛錬してきた事は体が覚えているのである。
あまりにも自然な動作になりすぎて、いつの間にか目覚ましが止まっていて遅刻……、なんてことには妹が居るからなりはしない。

安心して一撃の下に沈むがよい。

今日から新学期か。

授業は午前までだが、美弥に校舎を案内する約束をしている。

そういえばまだ美弥の制服姿を見せてもらっていないな。

よく出来た妹となれば、兄の意識下の願いを叶えることもやぶさかではないらしい。

丁度ノックと共に美弥が扉越しに話しかけてくる。

「兄さん、起きていますか？」

「あぁ。おはよう、美弥」

「ちゃ、ちゃんと起きたか確認します。入ってもいいですか？」

すぐさま飛び起きた俺は布団を三つ折にたたみ、よれていた寝巻きを正し、その場に正座してから返事をする。

「ど、どうぞ」

照れくさそうに下を向いている妹が手をもじもじさせながら入ってくる。

東武学園の制服に身を包んでいた。

見慣れているはずの制服であるが、妹とのコラボレーションを果たしたその姿に、全俺が目を奪われてしまった。

「か、可愛いよ……。うん、すっごく……」

美弥が顔を赤くしてからそっぽを向いて言う。

「まったく兄さんは可愛いしか言えないのですか？　……でも、ありがとうございます」

そう言い残して、スリッパをパタパタ鳴らして足早に部屋から出ていった。

今朝の朝食は俺だけ豪華に盛り付けられたおかずと、山になっている白米。

親父とお袋が「お前、また何かやったんだろう」といった顔で俺を見てくる。

そんな顔で見られても俺には解らない。

ご機嫌な美弥の鼻歌を聞きながら、結構な量の朝食をがんばって食べた。

そして、約一年ぶりとなる妹との登校。

「さぁ兄さん、学園へ参りましょうか」

この日の午後、俺は魔王と邂逅する事となる。

出会いの前日―Ｃａｕｔｉｏｎ―（後書き）

続きが気になる方は作者ページの外伝ＵＲＬに飛び、さらに後書きのＵＲＬを飛ぶと２話分見れます。
ただいま大幅な加筆作業中につき、しばらく続きは出ません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4202y/

どうやら、いじめられっ子の魔王が俺と世界征服したいそうです。new

2011年12月1日16時53分発行